

にも逢ひません。もう一夜、今夜だけ、また不思議に満願の夜といひますと、人に見られると聞きました。見られたら、何うしませう。口惜い……其の人の、咽喉、胸へ喰ひつきましても……

神職 これだ——した、かな婦めが。

お澤 え、あの其が何になりませう。晝から森にかくれました方が、何が何うでも、第一、人の目にかゝりますまいと、ふと思ひついたので。木の葉を被り、草に突伏しても、すくまりまして、雉、山鳥より、心のひけめで、見つけられさうに思はれて、気が氣ではありません。却つて、たゞの参詣人のやうにして居ります方が、何の觸りもありますまいと、存じたのでございませう。

神職 祕しがくしに祕め置くべき、此呪詛の形代を（藁人形を示す）言はば軽々しう身につけをつたは——別に、恐多い神木に打込んだのが、森の中にもまだ他にもあるからぢやろ。

お澤 い、え、い、え……昨夜までは、打つたまゝで置きました。私が一寸でも立離れます間に——今日は又何うした事でございませうか、胸騒ぎがしますまで……

禰宜 いや、胸騒ぎが凄じい、男を呪詛うて、責殺さうとする奴が。

お澤 あの、人に見つかりますか、鳥獸にも攫はれます。故障が出来さうでなりません。それで

……身につけて出ましたのです。そして……そして……お神ぬし様、皆様、誰方様も——憎い口惜しい男の五體に、五寸釘を打ちますなどと、鬼でなし、蛇でなし、そんな可恐い事は、思つて見もいたしません。可愛い、大事な、唯一人の男の兒が煩つて居りますものですから、其の病を——疫病がみを——

「え、。」「疫病神。」村人等又退る。

神職 疫病神を——

お澤 はい、封じます、其の願掛けなんでもございませうもの。

神職 町にも、村にも、此の八里四方、目下瘡瘡も、はしかもない、何の疾だ。

お澤 はい……

禰宜 何病ぢや。

お澤 はい、風邪を酷くこじりました。

神職（嘲笑ふ）はてな、風に釘を打てば何になる、はてな。

禰宜 はてな、はてな。

村人等も引入られ、小首を傾くる状、しかつめらし。

仕丁 はあ、皆様、奴が引掛るでござりませうで。

揃つて嘲り笑ふ。

神職 出来た。——掛ると言へば、身たちも、事件に引掛りぢや。人の一命にかゝはる事、始末をせねば済まされぬ。……よく深く企んだと見えて——見、其の婦、胸も、膝も、ひらしやらと……（お澤、いやが上にも身を細め、姿の亂れを引つくるひ引つくるひ、肩、袖、あはれに寂しく見ゆ）餘りと言へば雪よりも白い胸、白い肌、白い膝と思つたれば、色も成程白々としたが、衣服の下に、一重か、小袖か、眞白い衣を絡ひ居る。魔の女め、姿まで調べた。あれに（脇長く森を指す）形代を礎にして、釘を打つた杉のあたりに、如何やうな可汚しい可、忌しい仕掛があらうも知れぬ。いや、御身たち、（村人と禰宜に云ふ）此の婦を案内に引立てて、臨場裁断と申すのぢや。怪しい品々かつぼじつて来られぬ。證據の上に、根から詮議をせねばならぬ。さ、婦、立てい。

禰宜 立たう。

神職 許す許さんは其の上ぢや。身は——思ふ旨がある。一度社宅から出直す。棚村は、身とも参れ。——村の人も婦を連れて、引立てて——
村人等、且つためらひ、且つ、そゝり立ち、或は捜し、手近きを搔取つて、鉞、鋤の類、熊手、古箒など思ひ思ひに得ものを携ふ。

後見 先へ立て、先へ立たう。

禰宜 箒で、其のやきもちの頬を敲くぞ、立ちませい。

お澤 （急に立つて、颯と森に行く。一同面を見合すとともに追つて入る。神職と仕丁は反対に社宅——舞臺上には見えぬ、或は遠く萱の屋根のみ——に入る。舞臺空し。落葉もせず、常夜燈の光、幽に、梟、二度ばかり鳴く。）

神職 （威儀いかめしく太刀を佩き、盛装して出づ。仕丁相從ひ床几を掲げ出づ。神職、嚴に床几に掛る。傍に仕丁踞居て、棹尖に劍の輝ける一流の旗を捧ぐ。——別に老いたる仕丁、一人。一連の御幣と、幣ゆひたる榊を捧げて従ふ。）

お澤 （悄然として伊達巻のま、袖を合せ、裾をすらし、打うなだれつ、村人等に圍まれ出づ。引添へる禰宜の手に、獸の毛皮にて、男枕の如くしたる包一つ、怪き紐にてかゝりたるを不氣味らしく掲げ來り、神職の足近く、どさと差置く。）

神職 神のおほせぢや、婦、下に居れ。——誰ぞ御灯をかゝげい——（村人一人、燈を開く。灯にすかして）それは何だ。穿出したものか、ちびりと濡れて居る。や、（足を爪立つ）蛇が絡んだな。

禰宜 身どもなればこそ、近う寄つても見ましたれ。これは大木の杉の根に、草にかくしてござ

りましたが、おのづから樹の雫のしたゝります茂ゆる、びしゃくくと濡れて居ります。村の衆は一目見ますと、聲も立てずに遁げうとしました。あの、圓肌で、いびつづくつた、尾も頭も短う太い、むくりく、ぶくくと横にのたくりまして、毒氣は人を殺すと申す、可恐く、氣味の悪い、野槌と云ふ蛇そのまゝの形に見えました。なれども、結んだのは生蛇ではござりませぬ。此の悪念でも、さすがは婦で、包を結えましたが、組合はせた蛇の脱殻でござりますわ。

神職 野槌か、あゝ、聞いても忌はしい。……人目に觸れても近寄せまい巧ちやろ、企んだな。解け、解け。

禰宜 (解きつゝ) 山犬か、野狐か、いや、此の包みました皮は、貉らしうござります。一同目を注ぐ。お澤はうなだれ伏す。

神職 鏡——うむ、鐵輪——うむ、蠟燭——化粧道具、紅、白粉。お、お鐵漿、可厭なにほひぢや。……別に鐵槌、うむ、赤錆、黒錆、青錆の釘、ぞろくと……青い蜘蛛、紅い守宮、黒蜥蜴の血を塗つたも知れぬ。うむ、(きらりと佩刀を抜きそばむると齊しく、藁人形を其の獸の皮に投ぐ) やあ、もはや陳じまいな、婦——で、で、で先づ、男は何ものだ。

お澤 (息の下にて言ふ) 俳優です。

——「俳優」、「ほう俳優」、「俳優」と口々に言ひ繼ぐ。

神職 何ぢや、俳優?……町へ参つてでも居るか。國のものか。

お澤 いゝえ、大阪に——

禰宜 やけに大膽に吐すわい。

神職 おのれは、其の俳優の妾か。

お澤 いゝえ。

神職 聞けば、聞けば聞くほど、おのれは、こゝだくの邪淫を侵す。言ふまでもない、人の妾となつて汚れた身を、鍍塗上塗に汚し居る。剩へ、身のほどを辨へずして、百四五十里、二百里近く離れたまゝで人を咒詛ふ。

仕丁 その、その俳優は、今大阪で、名は何と言ふかな。姉様。

神職 退れ、棚村。恚る場合に、身等が、其の名を聞き知つても、禍は幾分か、其の呪詛はれた當人に及ぶと言ふ。聞くな。聞けば聞くほど、何が聞くほどの事もない。——淫奔、汚濁、しばらくの間も神の御前に汚らはしい。茨の鞭を、しやつ白脂の臀に當てて石段から追落さう。——が呆れ果てて聞くぞ、婦——其の釘を刺した形代を、肌に當てて居睡つた時の心持は、

何とあつた。

お澤 むすく痒うござりました。

禰宜 何ぢや薬人形をつけて……肌が痒い。つけくと吐す事よ。これは氣が變になつたと見え
る。

お澤 い、え、夢は地獄の針の山。——目の前に、茨に霜の降りましたやうな見上げる崖があり
まして、上れくと恐ろしい二つの鬼に責められます。淺ましい、恥しい、裸身に、あの針のざ
らざら刺さるよりは、鐵棒で挫かれないと、覺悟をして居りましたが、馬が、一頭、背後から、
青い火を上げ、黒煙を立てて駆けて来て、背中へ打つかりさうになりましたので、思はず、崖
へころがりますと、形代の釘でございませう、針の山の土が、つぶくと、此の乳へ……脇の
下へも刺りましたが、え、痛いのなら、うづくのなら、骨が裂けても堪へます。唯くわつと
身うちがほてつて、其の痒いこと、むづ痒さに、懷中へ手を入れて、うつかり拂ひましたのが、
つい、こぼれて、あ、皆さんのお目に留つたのでございませう。

神職 はて、しぶとい。地獄の針の山を、痒がる土根性ぢや。茨の鞭では堪へまい。よい事を申
したな、別に御罰の當てやうがある。何よりも先づ、其の、世に淺ましい、鬼畜のありさまを
見せう。見よう。——御身たちもよく覺えて、お社近い村里の、嫁、嬢々、娘の見せしめにも
し、且つは郡へも町へも觸れい。布氣田。

禰宜 は。

神職 したばたするなりや、手取り足取り……村の衆にも手傳はせて、其の婦の上衣を引剥げ。
髪を捌かせ、鐵輪を頭に、九つか、七つか、蠟燭を燃して、めらくくと、蛇の舌の如く頂かせ
ろ。

仕丁 こりや可い、可い。最上等の御分別。

神職 退れ、棚村。さ、神の御心ぢや、猶豫ふなよ。

——渠等、お澤を押取込めて、其のなせる事、神職の言の如し。両手を扼り、腰を押して、
眞正面に、看客に其の姿を露呈す。——

お澤 ヒイ……（齒を切りて忍泣く。）

神職 いや、蒼ざめ果てた、がまだ人間の婦の面ぢや。あからさまに、邪慳、陰惡の相を顯はす、
それ、其の般若、鬼女の面を被せろ。お、其の通り。鏡も胸に、な、それ、薬人形、片
手に鐵槌。——うむ其の通り。一度、二度、三度、ぐるくと引廻したらば、可。——何と、
丑の刻の咒詛の女魔は、一本齒の高下駄を穿くと言ふに、些とももの足りぬ。床几に立たせる、
引上げい。

渠は床几を立つ。人々お澤を抱すくめて床几に載す。黒髪高く亂れつ、一本の杉の梢に火
を捌き、艶媚にして嫵娜なる一個の鬼女、すつくと立つ——

お澤 え、！ 口惜しい。(殆ど痙攣的に丁と鐵槌を上げて、面斜めに牙白く、思はず神職を凝視す。)

神職 (魔を切るが如く、太刀を振り回かしつゝ後退る) した、かな邪氣ぢや、古今の悪氣ぢや、激い汚濁ぢや、禍ぢや。(忽ち心づきて太刀を納め、大なる幣を押取つて、飛蒐る) 御神、祓ひたまへ、浄めさせたまへ。(黒髪その呪詛の火を拂ひ消さむとするや、却つて青き火、幣に移りて、めらくと燃上り、心火と業火と、もの凄く立果る) やあ、消せ、消せ、悪火を消せ、悪火を消せ。え、埒あかぬ。床ぐるみに蹴落さぬかいやい。(狼狽て叫ぶ。人々床几ととも、お澤を押し落し、取包んで蠟燭の火を一度に消す。)

お澤 (崩折れて、倒れ伏す。)

神職 (吻と息して) —— 千慮の一失。あ、致しやうを過つた。却て淫邪の鬼の形相を火で明かに映し出した。此では御罰のしるしにも、いましめにも成らぬ。陰惨忍刻の趣は、元來、此の婦につきものの影であつたを、身ほどのものが氣付かなんだ。なあ、布氣田。よし、いや、村の衆。今度は鬼女、般若の面のかはりに、其のおかめの面を被せい、丑の刻參の裝束を剥ぎ、素裸にして、踊らせろ。陰を陽に翻すのぢや。

仕丁 あの裸踊、有難い。よい慰み、よい慰み。よい慰み。よい慰み！

神職 退れ、棚村。慰みものではないぞ、神の御罰ぢや。

禰宜 踊りませうかな。ひひひ。(ニヤリ)と笑ふ。)

神職 何さ、笛、太鼓で囃しながら、両手を引張り、ぐるぐる廻しに、七度まで引廻して突放せば、裸體の婦だ、仰向けに寝はせまい。目ともろともに、手も足も舞踊らう。

「遣るべい、」 「遣れ。」 「悪魔退散の御祈禱。」 村人は饒舌り立つ。太鼓は座につき、早や笛きこゆ。其の二三人は矢庭にお澤の衣に手を掛く。 ——

お澤 あ、まあ、まあ。

神職 構はず引剥げ。裸體のおかめだ。紅い二布……湯具は許せよ。

仕丁 腰巻、腰巻…… (手傳ひかゝる。)

禰宜 おこしなどと云ふのぢや。……汚れて居らうかの。

後見 此の婦なら、きれいでがすべい。

お澤 (身悶えしながら) 堪忍して下さいまし、堪忍して下さいまし、そればかりは、そればかりは。

神職 罷成らん！ 當社の掟ぢや。が、然やういたした上は、追放して許して遣る。

お澤 何うぞ、此のま、お許し下さいまし、唯お目の前を離れましたら、里へも家へも歸らずに、

あの谿河へ身を投げて、死でお詫をいたします。

神職 水は浅いわ。

お澤 いゝえ、あの急な激しい流れ、巖に身體を砕いても。——えゝ、情ない、口惜い。前刻から幾度か、舌を噛んで、舌を噛んで死なうと思つても、三日、五日、一目も寝ぬせるか、一枚も缺けない歯が皆弛んで、噛切るやくに立ちません。舌も縮んで唇を、唇を噛むばかり。(其唇より血を流す。)

神職 愈々悪鬼の形相ぢや。陽を以つて陰を拂ふ。笛、太鼓、さあ、囃せ。引立てろ。踊らせい。

とり／＼に、笛、太鼓の庭につきたるが、揃つて音を入れる。

お澤 (村人等に虐げられつ、) 堪忍ね、堪忍、堪忍して、よう。堪忍……あれえ。

からりと鳴つて、響くと齊しく、金色の機の梭、一具宙を飛落つ。一同吃驚す。社殿の片扉、颯と開く。

巫女 (階を馳せ下る。髪は姥子に、鼠小紋の紋着、胸に手箱を掛けたり。馳せ出でつ、其の

落ちたる梭を取つて押戴き、社頭に恭禮し、けいひつを掛く) しい、……しい……しい……

一同茫然とす。

御堂正面の扉、両方にさら／＼と開く。赤く輝きたる光、燦然として漲る裡に、秘密の境は

一面の雪景。此の時ちら／＼と降りかゝり、冬牡丹、寒菊、白玉、乙女櫛の咲満てる上に、

白雪の橋、奥殿にかゝりて玉虹の如きを、はら／＼と渡り出づる、氣高く、世にも美しき媛

神の姿見ゆ。

媛神 (白がさねして、薄紅梅に銀のさや形の衣、白地金欄の帯、髻結ひたる下髪の下に餘れるに、色紅にして、たとへば翡翠の羽にてはけるが如き一條の征矢を、さし込みにて前簪にかざしたるが、璽路を取つて掛けし襷を、片はづしにはづしながら、衝と廻廊の縁に出づ。凜として) お前たち、何をす。

——(一同ものも言ひ得ず、ぬかづき伏す。少しおかれて、童男と童女と、ならびに、目一つの怪しきが、唐輪と切禿にて、前なるは錦の袋に鏡を捧げ、後なるは階を馳せ下り、巫女の手より梭を取り受け、やがて、欄干擬寶珠の左右に控ふ。媛神、立直りて) ——お澤さん、お澤さん。

巫女 (取次ぐ) お女中、可恐い事はないぞな、はゞかり多や、畏けれど、お言葉ぞな、あれへの、おん前への。

お澤 はい——はい……

媛神 まだ形代を確り持つておいでだね。手がしびれよう。姥、預つてお上げ。(巫女受取つて手

箱に差置く——お澤さん、あなたの頼みは分りました。一念は届けて上げます。名高い俳優
ださうだけれど、私は知りません、何處に、いま何をして居ますか。
巫女 今日、今夜——唯今の事は、海山百里も離れまして、此の姉さまも、知りますまい。姥が
申上げませう。

媛神 聞きませう——お澤さん、其の男の生命を取るのだね。

お澤 今さら、申上げますも、空恐しうございます、空恐しう存じあげます。

媛神 森の中でも、此の場でも、私に頼むのは同じ事。それとも思ひ留るのかい。

お澤 いゝえ、私の生命をめされましても、一念だけは、あの一念だけは。——あんまり男の薄
情さ、大阪へも、追従つて参りましたけれど、もう……男は、石とも、氷とも、其の冷たさは
ありません。口も利かせはいたしません。

巫女 いやみ、つらみや、怨み、腹立ち、怒つたりの、泣きついたり、口惜しがつたり、武し
やぶりついたり、胸倉を取つたりの、それが何に成るものぞ。いゝ女が相好崩して見つともな
い。何も言はずに、心に怨んで、薄情ものに見せしめに、命の呪詛を、貴女様へ願掛けさしや
つた、姉さんは、お、お伶俐だの。いゝお娘だ。いゝお娘だ。さて何とや、男の生命を取る
のおやが、いま立處に殺すのか。手を萎し、足を折り、あの、昔田之助とか云ふものやうに

胴中と顔ばかりにしたいのかの、それともその上、口も利かせず、死んだも同様にと云ふ事か
いの。

お澤 え、もう一層（屹と意氣組む）ひと思ひに！

巫女 お姫様、お聞きの通りでござります。

媛神 男は？

巫女 これを御覽遊ばされまし。（胸の宝箱を高く捧げ、さし翳して見せ参らす。）

媛神 花の都の花の舞臺、咲いて亂れた花の中に、花の白拍子を舞つて居る……

巫女 座頭俳優が所作事で、道成寺とか、……申すのでござります。

神職 は、つ、は、つ、恐れながら、御神に伺ひ奉る、伺ひ奉る……謹み謹み白す。

媛神 （——無言——）

神職 恐れながら伺ひ奉る……御神慮に於かせられては——畏くも、これにて漏れ承ります
る處におきましては——これなる悪女の不届な願の趣……趣をお聞き届け……

媛神 肯きます。不届とは思ひませぬ。

神職 や、此の邪を、此の汚を、おとりいれにあひ成りまするか。其の御靈、御魂、御神體は、
いかなる、いづれより、天降らせませぬ……

お澤 あれ、彼處に——憎らしい。あ、お姫様。
媛神 ちやんとお狙ひ。

お澤 畜生！（切つて放つ。）

一陣の迅き風、一同聳目し、悚立す。

巫女 お見事や、お見事やの。（しやがれた笑）おほ、ほ。（凄く笑ふ。）

吹つゝの風、音凄まじく、荒波の響きを交ふ。舞臺暗黒。少時して、光さす時、巫女。ハタと藁人形を擲つ。其の位置の眞上より、振袖落ち、紅の裙、道成寺の白拍子の姿、一たび宙に流れ、きりりと舞ひつゝ、眞倒に落つ。もとより、仕掛けもの造りもの人形なるべし。神職、村人等、立騒ぐ。

お澤 あ、何うしませう、あれ、（其の胸、其の手を捜らうとして得ず、空しく搔搔るのみ。）媛神 それは幻、あなたの鏡に映るばかり、手に觸るのではありません。

お澤 あ、唯貴女のお姿ばかり、暗い思は晴れました。媛神様、お嬉しう存じます。

丁々坊 お使ひのもの！（森の梢に大音あり）——お髪の御矢、お返し申し上げる。……唯今。

（梢より先づ呼びて、忽ち枝より飛び下る。形は山賤の木樵にして、翼あり、面は烏天狗なり。腰に一挺の斧を帯ぶ）御矢をば其へ。——（女の童、階を下り、既にもとにつゝ、みた

る、錦の袋の上に受く。）

媛神 御苦勞ね。

巫女 我折れ、お早い事でもございましたの。

丁々坊 瞬く間と云ふは、凡そこれでございますな。何が、芝居は、大山一つ、柿の實つたやうな見物でございます。此奴、（白拍子）別嬪かと思へば、性は毛むくぢやらの漢が、白粉をつけて劔ねるであつた。

巫女 何を、何を言ふぞいの。何ごとや——山にばかり居らんと世の中を見さつしやれ、人が笑ひますに。何を言ふぞいの。

丁々坊 何か知らぬが、それは措け。はて、何とやら、テンツルテンツルテンツルテンか、鋸で樹をひくより、早間な腰を振廻いて。やあ。（不器用千萬なる身振にて不狀に踊りながら、白拍子のむくろを引跨ぎ、飛越え、劔越え、踊る）おもへば此の鐘うらめしやと、龍頭に手を掛け飛ぶぞと見えしが、引かついでぞ、ツーンチャンドンデンチンチンチンチンチンチンチンチンチン（劔上りつゝ）チャーン（忽ち、ガーン、ど、凄じき音す。——神職等腰をつく。丁々坊、落着き濟まして）と云ふ處ぢや。天井から、釣鐘が、ガーンと落ちて、パイと白拍子が飛込む拍子に——御矢が咽喉へ刺つた。（居すまひを直す）——は、ッ、姫君。大釣鐘と白拍子と、

飛ぶ、落つる、入違ひに、一矢、速に抜取りまして、虚空を一飛びに飛返つてござる。が、こ
こは風が吹きぬけます。途すがら、遠州灘は、荒海も、颯風も、大雨も、眞の暗夜の大暴風雨。
洗ひも拭ひもせせず、血ぬられた御矢は浄まつてござる。其のまゝにお指料。また、天を
飛びます、其の御矢の光りをもつて、沖に漂ひました大船の難破一艘、乗組んだ二百あまりが、
方角を認め、救はれまして、南無大権現、媛神様と、船の上に黒く並んで、禮拜恭禮をしまし
てござる。——御利益、——御奇特、祝着に存じ奉る。

巫女 お喜びを申し上げます。

媛神 (梢を仰ぐ) あゝ、空にきれいな太白星。あの光りにも恥かしい、……私の紅い簪なんぞ。

神職 御神、かけまくもかしこき、あやしき御神、此ま、生命を召されうまゝよ、遊ばされまし
た事すべて、正しき道でござりませうか——榛貞臣、平に、平に。……押して伺ひたてまつる。

媛神 存じません。

禰宜 え、御神、御神。

媛神 知らない。

——「平に一同、」「一同偏に、」「押して伺ひ奉る、」村人等も異口同音にやゝ迫り云ふ——

巫女 知らぬ、とおつしやる。

神職 いや、神々の道が知れませいで、世の中は東西南北を相失ひまする。

媛神 廻つてお歩行きなさいまし、お澤さんをぐるぐると廻したやうに、ほゝほ。さうして、道
の返事は——あゝ、あすこでして居る。あれにお聞き。

「のりつけほうほう、ほうほう、」——梟鳴く。

神職 何、あの梟鳥をお返事とは？

媛神 あなた方の言ふ事は、私には、時々あのやうに聞こえます。よくお聞きなさるがよい。

——梟、頻に鳴く。「のりつけほうほう、」——

老仕丁 のりつけほうほう。のりたまふや、つげたまふや。あやしき神の御聲ぢや、のりつけほ
うほう。(と言ふまゝに、真先に、梟に乗憑られて、目の色あやしく、身ふるひし、羽搏す。)
——これを見詰めて、禰宜と、仕丁と、もろともに、のり憑かれ、聲を上ぐ。——「のりつ
けほう。——のりつけほうほう、ほうほう。」

次第に村人等皆憑らる——「のりつけほうほう。ほうほう。ほうほう」——

神職 言語道断、たゞ事でない、一方ならぬ、夥多しい怪異ぢや。したゝかな邪氣ぢや。何が、
おのれ、何が、ほうほう……

(再び太刀を抜き、片手に幣を振り、飛より、煽りかゝる人々を激しくなぎ拂ひ打ち拂ふ間、やがて惑亂し次第に昏迷して——ほうほう。——思はず袂をふるひ、腰を刎ねて) ほう、ほう、のりつけ、のりつけほう。のりつけほう。「備考、此の時、看客或は哄笑すべし。敢て煩はしとせず。」(愠くして、一人一人、枝々より梟の呼び取る方に、ふはくとおびき入れらる。)

丁々坊 ははははは。 (腹を抱へて笑ふ。)

媛神 姥、お客を歸さう。あらしが來さうだから。

巫女 御意。

媛神 蘆毛、蘆毛。——(駒、おのづから、健かに、すとくと出づ。——ほうほうのりつけほう

ほう——と鳴きつゝ、來る。媛神。軽く手を拍つや、其の鞍に積めるまゝなる蕪、太根、人參の類、おのづから解けてばらくと左右に落つ。駒また高らかに鳴く。のりつけほうく。——)

媛神 ほ、ほ、(微笑みつゝ、寄りて、蘆毛の鼻頭を軽く拊つ) 何だい、お前まで。(駒、高嘶きす)「——此の時、看客の笑聲或は靜まらむ。然らんには、此の戯曲なかば成功たるべし。」——お澤さん、疲れたらう。乗つておいで。姥は影に添つて、見送つてお上げ——人里まで。

お澤 お姫様。

巫女 もろともにお禮をば申上げます。

蘆毛は、ひとりして鱈爪軽く、お澤に行く。

丁々坊 ははは、此の梟、羽を生せ。(戯れながら——熊手にかけて、白拍子の軀、藁人形、そのほか、釘、獸皮などを掻き浚ふ。)

巫女 さ、此のお娘。——貴女様に、御挨拶申上げて……

お澤 (はつと手をつかふ) お姫様。草刈、水波いたします。お傍に居たう存じます。

媛神 (廻廊に立つ)——私の傍においでだと、一つ目のおばけに成ります、可恐い、可恐い、……それに第一、こんな事、二度とはいけません。早く歸つて、そくさいにおくらし。——駒に乗るのに坐つて居ないで、遠慮なう。

お澤 (涙くみつゝ) お姫様。

巫女 丁どや——丑の上刻ぞの。(手綱を取る。)

媛神 (髪に眞白き手を、矢を黒髪に、女性の最も優しく、なやかなる容儀見ゆ。梭を持てるが背後に引添ひ、前なる女の童は、錦の袋を取出で下より翳し向く。媛神、半ば簪して、其の鏡を視る。丁々坊は熊手をあつかひ、巫女は手綱を捌きつゝ、——大空に、笙、箏、筆、幽なる樂。奥殿に再び雪ふる。まきおろして)——

——幕——

お忍び

時 現代

土地 北陸の大城市

人 北島勝行。(北陸地方裁判所長、客)

露三郎。(藝妓) 松代。(藝妓) 玉子。(お酌)

おむつ。(荒ものの店の女房) 納戸の媼。(聲のみ)

卓傳和尚。草念。(小僧)

谷郷團助。(請負業者にして博徒)

お美緒。(美妾の靈)

吉二。(飴賣) 千助。(せり呉服、遊人)

木菟。(少女に扮したる、二羽、或は三羽)

其一

川沿の路の送り提灯

其二

つゆの夜の荒れ邸

其一

吉二 飴や、棒飴や、棒飴かんく糖……つじうら……(呼びく出づる。)

おむつ (提灯) 暖簾のすき間より先づ仄見え、店さきに出で、土間の下駄をつまさき軽く、手に

町の湯へ行く支度を持って。軒を出づる時、かんく糖賣の小僧恰も來かゝる。

吉二 棒飴や、かんく糖。姉ちゃん買つとくれよ。

おむつ おや、お世辭のいゝこと、精が出ますね。姉さんといはれたのでは、義理にも買つてあ

げなけりやならないんだけれど、私のところは同商賣だよ。飴もかんく糖も箱にならべてある

ぢやないか、お前知つてるぢやないか。

吉二 うゝむ、癖になつて、買つておくれつて言つたんだよ、姉ちゃん。

おむつ 年増を姉ちゃん……ほゝほ、若くいつておくれのお禮に、一寸、いゝものをあげようね。

(店へ小戻りし、小さき紙包を手にして又出づ。提灯のあかりに吉二に見せ) うでたてでもない

けれど豌豆……道々おあがり。

吉二 ありがと、ありがと、姉ちゃん。

おむつ 何だねえ、大層なおじぎをして。ありがたうより、かんく糖のことさ。さあ、お稼ぎ。そこいらまで川端を一所に行きませう。(ゆく手を)いつもおんなじ處だけれど、松も、柳も、夜はさみしい土手だこと。

吉二 (又呼ぶ) かんく糖、辻占、かんく糖。――

――花道、(橋に擬ふ) 玉子。ぼつくりにて勢よく驅出したるが、ふと立留り、あとを見返る。

續いて、ぶら提灯を手に、千助。客。うしろに露三郎。弓張提灯を持つて松代の順)――

千助 (玉子に) そら、狐が鳴いてるぜ、こんくとうだ。

玉子 いやア、こはい。

――吉二とおむつ、舞臺を松の蔭に見えずなり、木菟二聲ばかりしたる時なり。玉子、千助に怯かされ、飛び歸つて、かじりつく。

千助 何だい、幽霊屋敷へ斥候をするて出て来た――おもちやの巴御前の癖に、それぢやあ

俱利伽羅峠の手あしまとひだ。旦那、暗くつて見えませんが、(提灯を高く西棧敷の方へ翳す)

晝間は佳い景色の山ですよ。

松代 (弓張を土間に向ける) まあ、流のふえたこと。(水の音)

客 あゝ、珍らしい聲がする。(吉二の賣聲を遠く聞く) 東京ぢやあ、もう久しいあとになつた。

此の邊では、まだ賣つて居るんだね。

松代 あなた、何ですの。

客 かりん糖よ、かうばしや、かりん糖だらう。(微醉なり)

露三郎 東京の、お菓子ぢやありません、駄菓子でございますわ。

松代 えゝ、細い棒形の飴に、かた豆を練込んだものなんです。

客 はゝあ、そこで名づけて、かんく糖か。何だか、少々氣になるね。しんが飴の奴を、豆で

堅くでツちた處は、一寸私のやうな甘いんだね。(笑ひながら、拱いたる腕を開いていふ。――

藍微塵の袴、無地博多の帯、着流し、雪駄を穿く。)

千助 ぢやらゝと何をおつしやる。……さあ、おい、玉子、かじりついて居ちや歩行かれな

いぢやないか。羽をたゝいて、巢立た、巢立た。

雛妓の袖のゆるゝこと、凡そ其の言の如し。前後して、荒もの屋の店に近づく。

千助 旦那、目ざす處の幽霊屋敷は、その角を、あの、暗い、(昔の侍小路へ提灯をかざしながら)

ら) 最もね、……明るくつては、怨念でも、亡魂でもありませんまいが――それ、曲つて入ると、

すぐの處で。

客 よし、ぢやあ一つ兜の緒をしめるかな。(や、輕佻なる舉動にて黒の中折帽をぐつと眉に引き)こゝは、泥濘るな。(爪立足)合點だ。(と裾を端折る)——皆わらふ。——

松代 まあ、お色の白いこと。

玉子 露三郎姉さんも、もつと白いわ。

露三郎 よして。極りが悪い。(手にせる、きれいな風呂敷包にて、半ば其の面を蔽ふ。——此のつゝみの中に、客の羽織、また袴あるべし。)

千助 よ、よ、御兩人——道行は色が白いと極つて居ますよ。

客 婦人の方は、雪國の夕顔でも、野郎は棚ツ尻の青瓢箪さ、濟まないね。いや、瓢箪ついでに、一杯、兜できめたくなつた。

千助 萬事こゝに心得て居りますから。(此の提げ持てる包には、重詰もの、吸筒の用意あり)何なら、一寸、聲をかけまして、縁臺を——いや、もう軒下に出て居ます。屋根を上げ縁をおろすと店になり……横ぐはへの川柳で、耳學問。旦那、博識でございませう。こゝいらはね、唯今渡りました、あの上の橋といふのから、山あそびに出掛けます、町方の物見遊山の往還、お小やすみも出来ようといふ仕掛けで、一寸葦簀を立掛けると茶店にもなります。何なら一口めしあがつて。

客 いや、めしあがる方は煙草にして、と一つ、買つて行かう。幽靈のお通夜をするのに、つゆじめりの線香の煙ぢやないが、立消えがしさうで、心細い。

千助 はてな、おつしやる事も墓場じみる。

玉子 こはいわ、わたし……

千助 またはじめたぜ。かういふ手足まとひが居ては、うかつに空邸へ踏込めますまい。つい其處だ、一つ様子を見て來ませう。……行かないか、一所によ。

松代 さあ。

千助 何だ、何うしたんだい、出て來た時の、前刻の勇氣は。

松代 行くわ。

千助 えらい。

玉子 わたしも。

千助 えらい。

客 すぐ後から。

松代 あとにお二人。……露姉さん、お樂み。

露三郎 そんなのだと死んでもいゝ。……なむあみだぶつ——(と靜にいふ。)

——きあア——(松代、玉子、おびえながら、千助に縋つて行く。)

客 結構なはなむけぢやないか、お念佛は。——何だつて騒ぐんだらう。

露三郎 あなた、それでも、空邸の怨霊は、襖の陰から——「なむ」——と、さういふんだつて、うはさなでございませう。

客 あ、然うだつて、なるほど、(間)「なむ」か。

露三郎 ——今晚は——(店を呼ぶ)あなた、お煙草は。

客 ……敷島、みのり……とかういふ時は、邪氣を拂つて、威勢よく、朝日がよからう。——煙草をおくれ。

露三郎 ……今晚は……誰も居ないんですかね、あけつ放しで。

客 こんな場合には、癖として聾の媼さんなどが居るものさ。——ごめんよ——

露三郎 今晚は——

おむつ (ぶら提灯を振つて驅戻る)おや、入らつしやいまし、姉さん、どうも失禮。

露三郎 あの松かげの提灯は、おかみさんだつたんですか。

客 それは、氣の毒だ。些とばかりの買もののに、呼返したもおなじだね。

おむつ い、え、夜分はもう商賣もございませんし、……おふくろが納戸に留守をして居ります

けれど、宵寢はします……それに耳が遠いものでございませうから。

客 (露三郎の顔を見て笑を合む)うらなひは當つたよ。

おむつ 何か、おうらなひなすつたんでございませうか。

露三郎 はあ。(あてやかに微笑む)大方、お湯か、買ものだらう。留守に違ひない、といふ、おうらなひ。

客 お待ち、お待ち。お湯か、買ひものか、留守だらう……そんなうらなひがあるものか。あるやうで、ないやうで、出るやうで、出ないやうで、……まるで、失せものの幽霊八卦だ。

おむつ いやでございませう。旦那。ですがね、姉さん、幽霊八卦とおつしやれば……

客 とにかく、朝日を二つ……朝日、二つ……といふと異だ。一ツと、敷島を二ツだ。

おむつ はい、はい。(提灯を賣ものの草鞋の綱に引掛け、小さな電燈)……ありがたう存じます。い、えね、姉さん。八卦、うらなひとおつしやれば、唯今あれなんでございませう。——小さ

なかん／＼糖賣と一所に、川岸を出掛けましたのでございませうがね、子供ごころに、いぢらし

い……些とばかり、商賣の残りものを袂へ入れてやりましたのを思に被て。……飴を。——飛

んでもない入らないと、申しますとね、辻占をあげようといふんでございませう。これは景品で、

さきも、まあ、たゞ奴なんでございませうから、それなら縁起だ、おくれよ何か。——そりや

いゝんでございますけれど、慌てものツちやありません。——提灯の灯でさ、あなた、辻うらを見ますのに、顔がくつついたらうではございませんか。此の髪と、刈込みの青いやうな子供の頭と——くつつきました時、川風で變な匂が芬としますと……あれ、かうした處を、奥の邸の、美しいお妾さんが、いきなり大刀で。それから、言はうやうのない、酷たらしい、……え、(身震ひする)——え、そして、あの、どちらへおいでなさいませ。

客 一服しよう、一寸休まして貰はうか。(縁臺に掛け、袂を探る) 燐寸を忘れた。

おむつ。手ばやに莫産を敷く。

露三郎 (弓張を疊み、蠟燭を客に寄す。吸ひつくる時、二人の顔きつぱり見ゆ。男は、瞳清く、鼻筋透り、頸の眞白き婦は、半襟の淺葱の影に、頬のあたり、やゝ寂し。)

おむつ (見惚るゝやうに、間) まあ、氣のつきません、唯今お煙草盆を……

客 串戯ぢやないよ。五月闇のこんな處で、床几で悠々と煙草盆ぢや、狸ばやしか、狐火の見物だ。結構、結構。

露三郎 遠くからですと、これも狐火かも知れませんか。ほゝ。(提灯の弓を、もとへ張る) おかみさん、それで、辻占は(と客に秋波す) どうだつたんですえ。

おむつ ……ところが、でございますよ、さうしますとね、姉さん。小半町ばかり前途の、あの

川端の稻荷様の祠の前に、はりせんぼんのやうな、白髪の逆立つた老人が、鐵棒見たいな、太い杖……仕込杖でございます……それを、兩手に、柄へ頤をのせるやうにして、熟と此方を見て、くらがりにぼうと立つて居るんでございますもの。——狒々だ、狒々だ、と皆かうはさの。

……

露三郎 あゝ、あれですか。

おむつ それなんでございますよ。今日、今夜、今といふではありませんけれど、町の中、横縦小路、路地裏まで、のそくと、顔世ごぜんを覗いて、歩いて居ます、高師直。此の邊へも、時々顯はれ出ますが、目について居りますもんですから。……唯今のそれは幻……氣のせるでございます。——すぐに消えたんでございますけれど、何にいたせ……姉さん、でございますませう。——奥のお妾さんと、圓い頭が、然うやつて、二つ並んで居る處を、いきなり、つぶりと肩さきへ浴びせたのが、其の爺の血氣ざかり。世盛り。——川の水を、頭から、いきなりかぶりましたやうに、ぞつとして、目が眩んで退ります處へ、店の前の、あなた様方の提灯は、夜の峠の炬火とも、お佛壇の燈明とも、ありがたかつたんでございますよ。

客 何……何です、何だい、其の老人は。

おむつ え、舊知行高の武家で、劍術つかひ。いまは大分おちぶれて居りますが、請負屋で、

博徒の親方で、昔一度は何とか議員にもなりましたさうで、その頃の、壯士の頭なんぞござい
ますつて。

客 は、あ、松脂で毛を堅めて、彈丸も徹さないといふ猛獸だ。女をぶつたくりの一六勝負か。
好色の鼻へ唇が反つて、劍術の鋭い牙と。——色の白い、肌の柔かな、髪の毛の黒い、人身御供を
掴むのには、資格が備り、條件は揃つてる。が、現に其の爺さんが、市内を横行するといふ次
第は。——然うか、死罪にならずに年が経つたか。

おむつ 死罪にも何にも、それどころでございますか。其の節、何のおとがめも受けやしません、
最も内證なんぞございませうけれど。

客 といふと……

露三郎 ほんたうに、何うしたといふんでせうねえ。

おむつ それがでございますね、あなた。……

千助 (けた、ましく) 旦那、旦那、旦那！

——松代、玉子、齊しく聲をあげて、人にも柱にも縋りつく。——おむつは、遁腰を店の麻
暖簾に半ば引込め、露三郎は客に寄添ふ——

客 (騒がず) 何うしたい。

千助 何うしたの、恚うしたのどころぢやありません。あ、驚いた。おなじ化ものでも、綺麗

なお妾だつて言ひますから、私も先棒を振つたんですが、申、申戲ぢやない、赤入道と、一ツ

目小僧。

客 赤入道？

千助 二抱へ、六尺餘。毛だらけです。そいつが一ツ目小僧を腰へぶらさげて、ヌツとも、ヌツ

とも、だしぬけでさ。やみを提灯でさぐり當てて、空邸の潛門を開けようとした出合頭に、虎
が豚を啖つたといふ、腥い、おくびを吐いて、毒氣ですな。

卓傳和尚 あは、おほ、はッはッはッ。(酒氣を帯びたり。腹も肩も揺つて顯はる) 騒ぐま
い、騒ぐまい。あッはッはッはッ。やあ、あやめ、かきつばた、鮮に浮んだな。如法、女菩薩
に取巻かれ、有頂天の雲に乗つたる檀那が、坊主に怯えるといふがあるものか。くらがりの坊
主は、やみの夜の石地藏と思へぢやよ。

千助 申戲ぢやありませんや。お、驚いた。幽霊屋敷から、だしぬけに……

卓傳 すなはち地獄で佛ぢやわいやい。たゞし、唐突は悪かつた。だしぬけの佛は、待ちまうけ
た晦日の鬼より可恐いか。おほ、は、は、は、が、さて、別嬪に取巻かれた連中には禁句かの。
其處が浮世ぢや、願以此功德無量……なむあみだぶ。……

小僧草念——(チーン、りんを打つ。和尚の太腰にかくる、ばかり、ひしと着いたる此の小僧の持てる、りんの形は、恰も、一ツ目小僧の、てんもく臺に缺茶碗を捧げ出でたる如くなり。)

卓傳 これ、墓經を誦げては居らんぞ。佛ぢや鬼ぢや、と申したればとて、説教でも談義でもない。慌てるな。(客を見る) お、こ、こにお連の方さうな、——些と酔ひました——失禮を。

客 はあ、晦日の鬼に恐れるものです。(縁臺を開く) 些とこれへ。

露三郎 お上人様、どうぞ。

卓傳 はて、御挨拶の。……ほ、ほ。お上人様といはれると、此の上に坊主になりたい。あ、就中、なよやかに美しいな。然らば、無明の橋を渡つて、山の破寺へ歸る處を、六道の辻へ迷うて、お邪魔を申さう。半座をたまはれ、棺桶に掛けた白布を汗拭にする分ぢや、辭義でもあるまい。……えいとこな。時に、いづれもは、奥なる、あの、空邸へ、揃つて、參詣……參詣はをかしいかの、ほ、ほ、お見舞も變ぢや、お通夜かの。はッはッはッ。

客 困りました。

卓傳 彼の探險とか申す儀で。

客 弱つた。

卓傳 はて、早い處は、ばけもの退治かな。

客 弱りました。一寸、きみ、千助さんか、御挨拶を頼むよ。

千助 和尚さん、實の處、其の旦那は、當地はじめての旅のお方でございますね。

卓傳 旅の御仁、成程、ばけもの退治には、お定りの旅の英雄、武者修業どのでおいぢやな。

客 お手柔に。

卓傳 これは一竹篋頂戴か。はあ、其處で。

千助 私はご存じの通り……いやご存じも何もありますまいが……全くのところ……何を祕しませう。

卓傳 懺悔ぢやの。

千助 へ、え、懺悔同然。婦連も知つて居ます。土地のなまけもの、のらくらもので、體のい、新地の地巡り。奇特に手前勘でござんしてね、今夜の處は。鹽豌豆か何かで、一猪口、かじつて居りますと、其の旦那が表座敷で、はな／＼しくめしあがつて居らつしやる。その中に、でございますね——中頃は一度消えましたが、近頃また、其所、此所ひそ／＼と沙汰のあります、此の空邸のうはさが出て居ますんです。幽霊のうはさだけ、地獄耳に聞込みますと、差出がましい事にかけては、大川の釣棹なんぞでございますから、ひゆうどろどろとお座敷へ立

顯はれ、酒をなめた唇から、べら／＼べらと青い火を煙草で吹かして饒舌りました。其のなぶりごろしのお妾とは、私、再從兄妹に當りますなぞと嘘ばかり。——其の嘘が眞實ぢやない、實になつた、と申すのはです、和尚様。……土地の人なら丁どさいはひ。……と其の旦那が、私の圖々しさに迷惑をなすつて、眞顔なお話——一體空邸の怪談といふのが、誰もまだ、白い姿も、だら／＼と赤い血も見たといふではありません。たゞ、優しい、弱い、もの凄い婦の聲で……（松代と玉子を見る）さあ、此方へ寄つたり。……いゝかい、こゝ（荒物屋）のおかみさん、お前さんなんぞは、裏に近いから、お馴染かも知れないがね、おかみさん、……おや、居ないね。

松代 玉ちゃんも、私も、冷い風が吹いて来て、ぞく／＼するといつたもんですから、板戸のすぐうしろが、内井戸ですつて……蓋をして来ようつて……さういつて……

千助 あゝ、なるほど。眞夜中に釣瓶のさがるもの凄さ、とかいつて、血屋敷以來、古井戸は不氣味だからね、こゝは地つゞきでさ、井の底を通ふかも知れませんぜ。其の何ですよ、女の聲で……

卓傳 これ／＼、震へるな、震へるな、草念よ、さあ、袖の中へ入れ。

千助 お小僧さんも知つて居なさるんですかい。——庭か、背戸か、古井戸か、天井からか、「な

む。」とばかり、その、女の聲が聞こえるといふんぢやございませんか。

卓傳 泣くか、叫ぶか、されば其の儀ぢや。

客 お上人。

卓傳 困つたな。

客 いや、御坊様。

卓傳 今度は、此方で弱りましたな。

客 まじめな處、旅とは申しても、實は活計のために、御當地の、一……會社へ、最近雇はれて参つたのですがね。

千助 保險會社のお方だと承りましたつけ、はあ。

客 松杉を植ゑる力はないのですが、旅宿住ひよりは、と一軒、家を借りますつもりで、心がけて居ります、と註文どほり、靜な處で、間數も多過ぎるくらゐ、何はおいて吃驚するほど屋賃がお安い。……また引越すまでもと思つて、すぐに家主に借りる話にしたんです。お上人、こんなのは、お布施のたしにはなりますまいが、土地ツ子になりましたら、これを御縁に、檀家の端へ願ひます。

卓傳 御奇特、御奇特。おほ、此の別嬪ともろともなら、土饅頭の比翼塚で、すぐにもお引取

り申さうぢやの。

露三郎 いやですよ。御坊様。

客 いやですよは情がないね、が、其の比翼塚より、一步手前で、貧乏世帯の下拵へに、これから行かうといふのが其の邸で。——一昨日の日曜。晝間通りがかりに、塀外から門構へを見ました。雨ふりだつたものですから、入つて見るまでもありません、庭は廣し、樹が茂つて、青葉若葉の濡色に、蒼白い梨の花が散残つた上へ、しつとりと百日紅、あの眞紅な花ですね。

おむつ (これよりさき、出でて暖簾の前にあり) あ、あの、其の百日紅、(いひかけて、婦たちをみまはす)あの暑くるしい樹が、あすこだけは眞夏も寒いやうな氣がするといふんでございます。

客 蒸々する微雨だといふのに、月夜に柘榴の實を透すやうです——あとは知らず、これから暑さに向ふ處、其の冷く身に沁むのが何より嬉しい、すぐにも借受けようと思ひました。(間)——實は、今夜は——停車場からの歸途なんですが、當地に居ました友達で、高等學校の教授なのが、暑中休暇を前にして、九州地方へ轉任になりました。……出發を送つて、驛で別れます時に、其の細君が、一寸、と私へ耳打ちして、あのお借りなさうといふ邸には祟りがある。ほかではないが、夜になると、女の聲で、「なむ。」「なむ。」といふんださうです、ために、幾度

人がかはつても、いつも空屋に成つて居ます——よく、氣をつけて、といふ注意でした。——うはさを其のまゝ、假に事實としてですね、私は考へた。幽霊は解脱して居るんだ。題目なり、念佛なり、「なむ。」と「こゑでも稱ふるからは、もはや得道して居る、早い話が、淨んで居ます、成佛して居る。それならいさゝかも懸念はない……

卓傳 ……されば成佛——拙僧も、これ、見得ではないが、風來坊主で、御同様に當地は昨今ぢや。……坊主の口からはいふまい事ぢやが、蛇の道は蛇、幽霊の道は卵塔で、早いところ耳へ入つた。貧乏寺の味噌椽ぎに、そりや、廣告をかねて、幽霊見届け、と山を下るべき處ぢやが、今のお言葉の、既に成佛してであつて見れば、ことさら拙僧などが、出向くのは、息を吹返した死人の枕もと、同然で、坊主は目觸りぢやと存じて、可惜その、百日紅の花見もせず居つたのぢやがの。よく聞くと、さうでない……

客 ないさうですよ。——友だちに別れました、さみしさもありましてね、驛からすぐ不了簡を起しました。新地で、飲んで居ますうちに、唯だ今、きいたせるか、不思議に耳に立つ、女連の言葉があります。——「なむ。」といふ、「なむ。」といふ。たとへば、其のお酌に、お前は、子だね、「なむ。」といふ。松代さんか、旦那は幾人ある、「なむ。」といふんです、「なむない。」といふんです。耳立つた。分りません。はてな、旅宿の女中や番頭などが、然ういへば、

時々「なむ」「なむ。」といったやうでもあるんだが、別に氣にも留まらなかつた。女の幽霊の聲と聞いた、さつきのあとで、これが耳についたんです。で、どうも、「なむ」は「否——い、え。」といふ事らしい。……

卓傳 然うぢや、其の儀ぢやと拙僧も存じた次第ぢやて。

客 あなたの方の受持ですが、——閻魔大王、先だつて、それよりも、黑白、明暗を決すべき裁判官——(間)——名奉行大岡越前、遠山の金さん……

露三郎 ——(につこり笑ふ。)

千助 こりや、こりや恐入つた、あてられた。どうも、賽の河原へ、だしぬけの葦、鼓草。三途の川岸の露や尾草で、おのろけは恐入つた。和尚さん、些とおたしなめなさいまし。……近頃當地で、古今の當りを取りました。東京役者の、大岡様、遠山の金さんなどに、旦那がそつくり似て居るといふんで、はなツから、大した騒ぎで。……

露三郎 知らない。(うつむく。)

卓傳 些と叱らうか、灸かな、ほ、ほ。これく草念、居睡りをするとかぜをひくぞ。ごらんぜい、幽霊に怯えて、ふるへる中から。

千助 はあ、お小僧は無邪氣でい。姉さんなどは幽霊以上の迷ひかたで、え、露三郎、こら

は人前ぢや「なむ。」といふ處ですぜ。

露三郎 いへませんね。

ときつぱりいふ。

千助 あてられた、えへ、へい？ なぜ……

露三郎 お隣へわるいから。

千助 お隣——あ、地獄か。(口をおさへて肩をすくめる)おとなり、へ、へ、へ、しかし、其の「なむ、惚れない。」とはいへませんや。ねえ、旦那、いかゞなものです、大岡様。

客 馬鹿な事を。其の意味ぢやあない。黑白明暗を決すべき、名判官、町奉行……どころぢやない、閻魔大王でましましたも、各地の方言、お國なまりを心得て居ないと、理非の判断がつか

かねるんです。……聞くと、其の惨殺された、かはいさうな妾は、嫉妬深い、暴虐恚亂な博徒に、不義をしたといつて斬られたさうです。が、閻魔王がそれに向つて、汝は密通をしたか——妾の密通も、法はづれたが、地獄だ、まあ、然ういつたとします。妾が、「なむ。」と唯いつたんでは、「なむ、閻魔王、許したまへ。」と恐入つたのか、「い、え、不義はいたしません。」と異議を言立てたのか、判別がつかますまい。——さて、そんな話半ばへ、其の人物(千助)が一

おむつ え、然うでございますとも、旦那方。内のお姫さんなどは、よく存じて居ります。おとなしい、しとやかな、優しいお方で。——瓦解以來、お家の不運から、さうやつて、狒々の世話に、……なぐさみものに成つて居なすつたさうですが、歴乎とした武家の、もと嬢様ですから、本が讀めます。堅い書物も、草双紙も、また澤山持つて居なすつて、朝晩、そればかりがお楽しみ。十二三の男の子の、貧乏で、本の買へないのが、土塀の崩れから、百日紅の花の影に、うすぐらい座敷にほんのりと、繪もおもしろさうな讀本と、うつくしいお妾さんを覗見をしたのが縁で。

客 (袖を合せ、ふと、うなづく。)

おむつ 繪本など持たせてもやれば、返すのに出入りしますね、一所に見ても居ましたでせう。ついで、可愛い處から、それはね、お膳の傍に坐つた時は、銀の振出しのお箸で、字を繪を——さしたり、里芋の煮たのぐらる挾んで食べましたかも分りません。……蠟燭のあかりで、お夜食を——前刻も私が然う申しました。其の男の子の青い頭と、うつくしい顔が、繪のやうに見えたんですつて。……これが其の頃の洋燈なら、はずみに蹴倒して、ぱつと火事になつて。

千助 ……靜に、靜に——

おむつ い、え、いつそ焼了へば、あとの、そんな情なさはなかつたんでせうのに。——夜博突

の、晝劍術……今でも一段高うした道場があるさうですが、すたんばつたんの用心に、いつも蠟燭燈臺で居たんださうです。最もお聞までは誰も存じません、ほ、……(さみしく笑ふ。)

卓傳 拙僧も聞いた。——邪惡の劍の修羅道、貪財の餓鬼道、晝夜の境め逢魔時、また悪い時に、鬘と頭がくつついた。大山師の博徒が其處へ、だしぬけに、ヌイと立つた。やくざ、ならすの出入が多い、口説いて靡かぬ腹いせと、見せびらかされる猜とで、告口、蔭口が思遣られる。

それな、だしぬけにヌイと立つたわ。うぬれ、姦婦と、怒喚くと、仕込杖の大刀で、「なむ。」と此處でぢや、婦人が聲を絞るのと一所に浴びせた。其ツ切ぢや。……切りさいなまれても、うう、とも、お、とも呻吟きもせなんだ、げぢやな。それ、最初の一太刀斬られると、お妾は少年を庭へ突飛ばして、跣足で庭へ遁げたんぢやが、百日紅の樹ではたと支へて留まつた。發機は高い、塀は低い、崩れた穴を踏上つて、少年は、塀を飛んで裏へ遁げた。——あとでぢやな、——黒髪を引つかみ、それよ、顔も、乳も仰向かせ、百日紅へ縛めてな、土女郎、口をきけ、ものを言へ。うぬ吐せ、泣け、喚えろ、と、突いた、切つた、流れる血は、柳の腰へも、うの花の白い脛へもした、らす、百日紅の花にしぶいたげぢや。

おむつ 何とまあ、その通りなんですつて、ほかにも見たもの、饒舌つたものもあるんでせうが、うちのお姫さんが、裏の物置へ澤庵を出しに行つて、生垣の崩れから、博徒が、子分の青鬼赤

鬼に、手燭を持たせて斬る處を、何でも山寺の遠い處で、お彼岸に見せます、火炎の地獄の繪のやうに、現在赤い血も、白い膚も木葉越に見たんですつて、……めくらにならずに、聾になつた、と自分の因果でもあるやうに、いつも申すんでございましてね。

——皆面を蔽ふ。——

卓傳 な、聞くも無慙な。昔より、言ひつたへにも、もの語りにも、嫉妬、暴悪の毒刃に刻まれる、薄命な妾のおよそ定まつた命ぢやが、おなじ樹木なれども、松、櫻、榎にもせい、いましめられたと聞く時に、袖もあり、裳も見える。氣の所爲ぢや、百日紅はその滑かさよ、白い枝の脇の下を、人が擦れば、赤う、ほ、ほ、ほ、ほ、と笑ふと言ふぞい。あの樹に限つて、手觸りも暖いに因つてな……襟を深く棲を引いて居たにせい、聞くものには露體、白身……に見えるがの。さてもく、酷たらしい。が、覺悟を極めた女の一念、「なむ」のほかに、聲さへ立てず、枝も葉も切裂かれた。——何と、これを、あとくでは、殺した當の博徒めが、内々人は人にも話して憚らぬ。さ、世の中に、あらう事か。

客 しかし、それは、ないだめしではないのです。裁かれて死罪にならない以上は、年貢が濟むと、懺悔などと、人に説教をするのもあります。

千助 ところが、何と仕つて、年貢をすまずどころか、風邪薬だつて買ひはしません。擬の政黨屋で、壯士の頭領——其の頃の選舉騒ぎといふものは、薄々知つて居りますが、拔刀第一……白晝の、まるで戦争で、敵、味方、ぶつかつた廣場には、負傷、死骸が、ごろくといふ中に、裸身の其のお妾に、小倉の破袴をはかせ、上半身、洋服を着せて轉がしてあつたといひます。博徒の方が、羽ぶりのい、勝つた、お味方でございましたさうですからね。——わが、寵愛を裏切つて、敵に心を通はす婦か、何かで、變装で、敵黨へ密書を運ぶ途中を、野原の斬合に卷込まれた、よい見せしめ、女間諜、と極めたものです。一體元來……

客 皆まで聞くには及びません。其の當時の地方では、そのくらゐな事はあつたかも知れないね。あ、しかし、かはいさうに。(歎息す。)

卓傳 かぞへて三十七回忌……四十回忌か。お、一念は三千年、何としても浮ばれまいなう。——智識も道德も持合はせのない、味噌摺坊主の、すりこ木ぢやが、その、「なむ」といふ聲のあとへ、せめて彌陀佛彌陀佛と、稱へて進じよう、と企てた、企てたぢや。内々、また、目論見もないでござらぬ。撞かぬ鐘同然な山寺の鉢坊主、一晚通夜をしたといふだけでも、平地人すなはち町方の衆へは、ごうん、もんくもん、もうんと響かうとな、鳴もの入の廣告ぢやて。かの、チンドン屋、とんとな。一人では派が利かぬ。聊か誂へがなうては、と宗門で護摩は焚かねど、それ道具立のために、此の小僧——藪醫者の藥箱で、尻へつけたのが遣り損ひ、いや、

もう、其の女の聲を。

客 聲を。

千助 其の聲を。

卓傳 さ、さ、聞くが、否や、震へ出した。猪の子の瓜坊が、忽ち精靈棚の白茄子よ。瘡の大熱でも出さうな鹽梅。一人歸すには足腰が立たぬ。大敗北、とも崩れで、拙僧も遁げた、遁げた處を、こなたと潛り門で顔合せ、いや、面目もない次第。

松代 お上人さん、眞個に、其の聲がしたんですか。

卓傳 鰐口で賽錢を噛みたい坊主でも、欄間の花に嘘は吐かぬ。十一時、さあ、子の刻さがりか、板道場の方ではない、夜食の膳の場所らしい、襖の蔭の暗さから、明かに、「なむ。」——

——一同、しばらく間。——

——おむつや、おむつどのや——（皺びたる聲納戸より呼ぶ、耳聾ひとりといふ老嫗なり。）

老嫗の聲 ……井戸わきに、おむつや。誰方ぢやか、きれいな婦のひとが立つてござるがの。

——けた、ましき聲。忽ちにして、もろ崩れに橋の上（はな道）へ。唯、玉子のまろび伏したるに、松代折重る。怪し飛んだる小僧、二人のうしろにて、ふるへ打ちに、りんを鳴らす、

此の音に二人また悲鳴を揚ぐ。……

千助 （おなじく遁げたるが、怯えたる聲する）旦那、こりや不可え……引返して、引返して、へい、また來ます。何しろ二人を新地まで送りますから。……さあ、立つた、早く確り。

草念 （千助等の幕に入る時）和尚様のう、和尚様のう。（古風な呼び聲。手放しに泣出す。）

卓傳 あの體ぢや、これは負借みにも踏留まるわけには參らぬ。……あなたは。

客 お笑ひ下さい。借りると極めました、私の家です。參つて見ます。

卓傳 おもしろい。いや、お心組み、然やうと存する。然らば。……女菩薩も、ごゆるされ。（のつしりと立つ。）

露三郎 お靜に。

卓傳 草念、草念、これ、これ、はてさて、困つた奴ぢや。負つて遣らう。——勝手が悪いわ。

（かたぐるまに、すかりと負ふ。あたまの上にて、草念、チーン、と鳴らす。——驚く）馬鹿めが、頭の上で、チリン、何ぢや、空を行く幽霊の筈が鳴るのか、と思ふわい。（揚幕へ。）

客 何うするね。（女にいふ。）

露三郎 （既に客の袖に縫れるが）もう私、あなたと離れては、一あしも……

客 行かうか。（立つ。はらくくと雨の音）あ、ぱらついて來た。これを借りるよ。次手に向う

で古壘の上敷だ。(縁臺の莫蔭を取つて被ぐ。)

露三郎 (無言にて、ぴつたり寄添ひ、莫蔭をとみにす。)

客 以前、東京の道灌山の蟲聞きに、夜が更けると、こんなのがよくあつた。足音で出會がかくれるのさ。

露三郎 見せてやりたい、私は嬉しい。(眞白い手に弓張提灯の灯をあげ向うをすかして)あれ、お小僧さんをのせた坊さんの脊の高いこと、松の樹の上より高い……お妾さんの殺される時、若い子の塀を飛んだのは、あんなでせうか。え、それより何だか魔物のやうですわね。

客 此方の方が化ものだよ。おかみさん、こはくはないかね——いえさ、あとで……

おむつ はい、い、え、満洲へまるつて居ります……やどが軍人でございますから。

客 たのもしいな。おかげで一週に陽氣になつた。(歩行出す)あの磧でどうだ、此の、形を、小屋がけで一幕出さうか。

露三郎 え、私嬉しいわ。

客 提灯は私が持たう。しかし、お妾ごろしだぜ。

露三郎 (右手提灯を渡しながら) 私嬉しい、殺されてもようございますわ。(左手はなれて、裳、するりと地に敷く。)

客 褌が濡れるぜ。氣をつけないと。

おむつ (……木下闇なる横道へかゝる二人を、うつかり見送る) どれ、此方は湯で濡れよう。

(電燈を消す。舞臺に提灯一つ、草履、草鞋とともにつるしおきたる手に取る)……それとも心中……いやだねえ、あ、辻占があつたつけ。(帯より取る。すかすと提灯のほの暗さ)あ、あぶり出した。(燭の灯に寄する時、雨や、繁く、誂へのどろくにて、辻占の紙片めらりと燃ゆ)危い。(女房わななくと震へ、吹消して燈消ゆ。)

—— 暗轉。或は舞臺廻る ——

其二

客 は、あ、これが約束の道場か。……此の一段高い處で、丁半は圖々しい。——

舞臺正面、殆ど黒くすぶりの壁の一方、一枚、板扉を開きつゝ、莫蔭にくるまり、雨にかつ濡色なる、したゝるばかりの露三郎、おくれ毛を艶々と搔上げながら、客と姿を顯はす。ただし、これよりさき、舞臺のまはれる時、がらんとして、空しく寂し。座敷のなかばに、破れ古びたる赤の毛氈を敷設く。はげたる蝶足の膳一具、竹の皮包、茶碗など見え、貧乏徳利を並べ、缺け損じたる手水鉢に、百日紅三枝ばかり。同時につい居る、二人の少女、面は白

く可憐なるが、張子にて木菟の耳の立てるを頂きたる、一羽は、蠟燭のしんを剪り、また徳利を振試み、一羽は百日紅の枝ぶりを繕ひ、齊しく客を迎ふる振なるが、あかるく顯はれつとも、やがて、雨の音一際立ち、どろ／＼の鳴りもの高まるとともに、相顧み、うなづく状して、聲なし、かみて、襖、しもて障子の左右に消ゆ。消ゆるとともに、其の正面の板戸一枚、二人の姿立出でたる——露三郎は、片手に提灯、胸に模様染色のきよらなる風呂敷包を當て、褌を曳く。其の背を莫産にて蔽ひつゝ、客は、片手に、此の時、重箱の包を提ぐ。

露三郎 あ、れ。(また縫る。)

客 あ、あの膳か。私も一寸驚いた。何、和尚の業だよ。——それより、これ、床へ竹の子が突出てる、拔身の槍で、入鹿の館だ、物騒千萬。は、は、板敷がぶく／＼する、足許を氣をつけて、ぐいと裾を端折んなよ。(莫産を棄つ。つしりと、濡れた音する。)

露三郎 それでも、あなたのお邸で、ぶしつけでございませぬもの。煤拂ではあるまいし。……

客 引越したと思へばいゝのさ。(近づいて膳の邊を視る)あ、遙々と来たやうだ。が、先づ、孤屋の灯にありついた。百目蠟燭、朱塗の燭臺、企てたる哉、あの、和尚。狸が淨瑠璃を語りさうだ。——提灯をお消し。……

露三郎 ですが、なりたけ明い方が。

客 所帯持は悪さうだぜ。まあ、お坐り。(かみ手と、しも手へ)飲んで居たな。(徳利をふる)とく、とく、とく。ほう、有る。だぶ、だぶ、だぶ。有る。が、思ひなしか、音が何うも、抹香くさい。

露三郎 あの、お酒は、此方に支度がしてございますわ。(包を解く。)

客 ——千助か。あいつ出會がしらの入道に驚いて、はふり出して逃げたのを、潜門の足許で、見つけて拾つて来て、いゝ鹽梅だね。しかし、重箱に酒があるのかい。

露三郎 組重の下が、吸筒に出来て居ますんです。……當地では、茸狩や、お花見の時なんその御馳走に。

客 今夜の花見は百日紅。(間)……といふのを、弱蟲だと、一體さし控へなければならぬ場所だが、どうせ一所に來たお前さんだ。ご覽、つゝじ、卯の花はこぼれても咲いて居ようものを、活花には見た事もない、百日紅で飲んで居たんだ。和尚なか／＼行るぢやあないか。道理こそ、膳の上は、千ものだが鱒つきの河豚と來てるぜ、和尚どうも、したゝかものです。

露三郎 いかゞ、お一つ。

客 む、朱塗の杯、あゝ、お前さんの白い指に、よく似合ふ。

露三郎 あんな事を——河豚の鱒でございますわ。

客 そいつが、あめが下、美味いとさ。何しろ、其の杯は、あとで、お前さんの紅い唇をつけてから、あらためて頂く方が本筋らしい。かけつけた、此の茶碗で行かうよ。……處で、御馳走は、たまご焼……お極りと。錦糸湯皮か、胡桃の砂糖煮、紅白の蒲鉾だ。青味に春菊のひたしものと、酢鰯を入れない處が尋常で、きれいな事だ。なるほど朱塗の小杯だね。茶碗酒は恐多い。(煽る。)

露三郎 ですから、あなた、これでお一つ。

客 飲んでおよこし。さ、酌をしよう。(吸筒を取つてつぐ) 蒔繪の重組、かたばかりだが、緋の毛氈、燈火は燭臺。

露三郎 (杯をふくんで一口) 恥かしい……何を凝と視て居らつしやいます。

客 見惚れて居るんだ。

露三郎 いやでございます。

客 いや、姿にも、襟にも、帯にも、腰にも、裳にも、不思議なほど、よく似合ふ。しかし、はじめから思つたんだが、近頃は東京で殆ど見ない、紫の切をかけた、其はたしか、割鹿子といふんだね。(しんみりと沈んできく。)

露三郎 あ。(軽くいふ) これは、あの、然ういへば似て居ます。てんじん髷、三輪にも、何處か

似て、うつくしいお妾さんなぞですと、それこそ見惚れるやうでせうけれど、私のは、まやか
しなんです。

客 まやかしとは？

露三郎 多勢が一座の時、誰もこんな結び方はして居なかつたでせう。東京だの京阪地だの眞似事なんでせうけれど……新地には、此の月、菖蒲踊といふのがあります。番組に——新ものですつて、勢の消防夫のなりで、獅子を使ふんでございます。その、男鬚に結つて居るのでございますわ。でも、そのなりで、町を歩行いたり、出入りをしますと、交番が喧しいもんでから、こんなに、切をかけたばかりですわ。

客 何しろ、似合つたよ。勢の獅子かい、其のせるで強んだね。いゝえさ、こゝまで来たのは、因より、隠せるものなら、見せまいと思つた、因縁づきの此の百日紅。私が見てさへ、血だらけの腕一本落ちてるんぢやないかと思ふのに、いまでも美しいお妾なぞと、えらいよ、すつきりといふんだから。

露三郎 あなたと一所なんですもの。

客 私と。

露三郎 大岡越前守様、遠山の金さんですもの。お奉行様と一所ですから、何にも可怖くはあり

ませんわ。

客 やすみ〜……詰らん事を、——一つ貫はう。

露三郎 お品がよく、威があつて……さうして、あの、すつと意氣な。(嬉しさうに、又につこり。)
客 重詰の蒲鉾か(一つ頬張る) 鬨斗をはつた、のり入見たいだ、中味は怪しい、紅白の水引野郎といはないばかりだ。

露三郎 勿體なうございますわ。ほんたうに舞臺にそつくり。

客 猛烈だね。獅子の如し。……しかし、其の舞臺は見たいね。——舞臺といへば、さうだ、新地ではさをして居たが、珍らしいお前さんの名は、路考、杜若、糸三に似たから糸三、田之助に似たから田之助といったやうに、役者の名から出たんださうだね。

露三郎 細りと弱々しい、うつくしい、其で居て、婀娜な役者だつたといひますもの。——似るもんですか。第一、私はいやなんですのに、主人だの、皆して、然ういつて、呼ぶんです。旅役者だつたさうですけど、この土地では大した人氣で、二三年も打ちつづけて居ましたさうです。後では何處か旅さきで、殺されたとか、斬られたとかつて。そんなですから、それは、あなた、ものあはれに、愁がきく。仇討ものですと、御新造でも、娘でも、姉でも、妹でも、吃と返討になる、弱い女、なぶられる女、切られる女、裂かれる女、時代ものだと、あの戀絹

客 こひぎぬ?

露三郎 安達原の一つ家の。

客 あ、都方の遊女か。

露三郎 それから皿屋敷の腰元。月の雨傘の誰でしたつけ。紅血缺血の繼しい娘。きられお富のそれなんか——ばくちうちの一刀づつに、身を刻んで、ひい——ひい——もう聞いたものは、夜道を歩行くと、橋の上でも、屋の棟でも、遠くの山でも、むかうの森でも、其の泣聲が響いて来て、つい自分でも、ひい、と泣きさうになつたんですつて。氣味が悪うございますわね。三十年餘も前のこと、丁ど其の頃だといふんです。お妾さんが、ひどい殺されやうをなすつたのは——

客 強いなあ。一寸、こゝで、そんな話をしていゝのかい。

露三郎 こはい苦しい思ひして、無理にも、あなたに繼りたさに。(思はず身うちを震はす、此の時、恍惚と客を見つゝ、いきはずみ、おくれ毛亂るゝ。)

客 それ、鬨の切が弛んだよ。

露三郎 一層、まやかしをうつちやつて、ほんたうの事をお目につけて存じます。こんなです

わ。(うつむけに雪なす頸を、男に向け、清げにさしのばす時、浮く腰と、髷の重さに、膝と膝
——思はず相合ふ)これ、ね。(笄をきざりと抜く、藤紫の切、離るゝ)男髷……何うせ、かな
はぬ戀ですけれど、髪を切つたと見て下さい。

客 切られて、堪るか、一筋だつて。

露三郎 え、ほんたうにさうでした……貴方のお目にとまつたのは、割鹿子の紫ばかり、お轉婆
をした、どうしませう。(切をつかね、髪に巻き、笄を突通さむとして、三たび二たび毛筋をは
づす)手が震へて通りません。——あなた、どうぞ、手を貸して。

客 (片膝立に胸を抱込み、笄を通す。其のまゝ、や、間。——百日紅を且つ見守る)……お露さ
ん、私も凡夫だ。二人で慙うした處を思ふと、百日紅の枝を迂つて、塀を飛んで遁げたといふ、
其の時の少年は、いま東京で整と生きて實は私のともだちだ、別懇な親しいなかな。藤紫の割
鹿子、と、ものに憑かれたやうに何時もいふ。血に染め骨に紫を刻んで居る——ふと、前刻、
新地で、其の髷を見て、その、あはれな妾の面影をさへしのんだ處へ、酒の勢につれたとはい
へ、思ひがけない、お前さんが、此の邸へ来ようと言ふ……私は豫て期した事だが、不思議に
導かれたのも、ものなりゆき。これで思ふと、私の親友は、藤紫と手さへ頬さへ觸れぬとい
ふが、或は肌が合つたかも知れない。

——「なむ。」——

襖の陰よりはつきりと、婦の「いゝゝ」。

露三郎 は。(息を詰める。)

——「なむ。」……(再び。)

客 (衝と立つ) お露さん、私が居る。……更めて挨拶しよう。……袴を。

露三郎 (つゝ、みを解き、袴を開き、とりあげて客の手へ、うしろへ、つき膝の姿しなよく、斜に
や、胸を反らして、袴腰を當てつゝ) 殿様。(肅然と立てる、客に、紋着の羽織を着せる。)

客 (此の時、形態備はり、容格調ひ、儼然として司法官の威顯はる) お前は靜に——(襖に向
ふ)それなる婦人。智も、徳も、力もない、凡俗のやくざだが、毎朝、法華經一卷、二十有餘
年、觀音經を讀誦して怠らない、(内懷より袱紗のま、折本を額に捧持す)唯そのものがお聞
き申す。唯今の聲のぬしは、如何なる姿で居らるゝのか。

幻の聲の女 露三郎……

露三郎 え、。

幻の聲の女 ……露三郎の夜芝居を見にまるりがけ……髪を割鹿子に結つて、

露三郎 あ。(鬢をおさへる。)

幻の聲の女 藤紫の切をかけ、

露三郎 あ。(袖にて鬘を蔽ふ。)

幻の聲の女 お納戸の薄い色、柳立わきの着ものを着、濃い水色に撫子の半襟、帯、黒緇子に驚のぬひとり、白の縮緬に、藍、淺葱の團扇の數。見えつかくれつ螢の色燃えるのも消えるばかりの長襦袢。緋縮緬の蹴出しして……

露三郎 (操らるゝに似て、雙の手の撓ひ、わなゝき觸る袖、帯の模様、色彩、幻の聲と殆ど同じ。其の一つ一つ、言葉の綾に、織られ、縫はれ、細く、身を絞つて、恍として意識を失ひ、絡へる色絹も、其の膚も、雨に卵の花の濡伏したる如く横に倒る。)

客 (膝をつき、膝に露三郎を、たわゝに抱く) お露、お露さん、どうした。

露三郎 (燭火暗うして、雨しきり也。やがて睫毛ながく眉あざやかに、すゞしき瞳きつぱりと) おゝ、殿様。……私はお露さんではありません。(聲や、強く) 谷郷團助に殺されました……其の灯を消して下さいまし、恥しい……美緒なんです……

客 (顔に近き提灯をフツと消す。燭臺のみ) しつかりするんだ、私が居る。私が居る。

露三郎：美緒 いゝえ、美緒です、美緒でございます。お氣味が悪くも、手を取つて。……氷より冷いでせう……三年、五年、七年、十年、二十年、三十年、やがて四十年盡きない怨恨に、

氣を張詰めては居ますけれど、弱い女でございます、冷いばかりか、お觸り遊ばす、この肌は、もう閨伽桶の水の泡、朽葉の櫛の霜と消えて、煙のやうかも分りません。

客 氣を確に、消えないやうに、確乎と抱いて遣らう。

もの凄まじき響と同時に、一枚、しも手の障子を蹴倒す。障子を蹴倒すと雖も、足はのしのしとして、白髪逆立つ、老人顯はる。

團助 奴女郎!

露：美緒。來たな。(片手つきに、男に抱かれたる胸より胸を開き、團助を見るなり、忽ち、張ある聲音。)

客 ……出て來さうだと思つたよ。(衝と立つ。)

團助 (仕込杖を抜きうち、女に斬りかけ、外づすを、太刀を颯と控へ、ぎろりと睨む) むかしの時を其のまゝや、其のまゝに見せをるがいやい。(面構に似もやらず、なまぬるき、ねばれる音聲) やせ狐やか、こけ狸やか、また此の少年もや、大いものに成りくさつた。こりや。(勝行の眉に切尖を擬す。)

客 馬鹿。(一呵す。)

團助 ふゝん、馬鹿のすることが、どんなこつちややら、見まつしやい。これから見せるがに。

まつ、汝が眞正の人間でもいに、俺の、権力と勢力でに、狸にして屠り殺いて、あとでにい、
大手を振つて歩行いて見せるが、どんなものやけ。えひ、えひ。——一刀流の冴えた處を、
つぶりとお見舞申さうかに。こけ狸め。(一刀を取直す。)

客 無禮だ。

團助 何や。

客 何だと思ふ。北畠勝行だ、北陸地方裁判所長である。——(端然、座につく、恰も道場の床

に、板の破れめを抽出る筈より、衣紋高し)深夜の暗闇に、かくの如き場所に立入るのに、覺

悟がなくなつてなると思ふか。軽く一つ壁を打てば警官は立處だ。短銃も心得てる。(片手を懐に

莞爾とす。たゞし、短銃は實にあらず)第一、劍術のうまさといふのが、學習院仕込みの町奉

行——殿様だから、柳生流だ。

團助 (氣に打たれてためらふ。)

北畠勝行 さて、時ならない稻妻で……柄にもない雷嫌ひだから、慄然とした。一杯いかう。其

の茶碗を。……いや、茶碗酒は、紗綾形のお襖の前ものではない。——朱塗の杯、お酌を願

はう。

露・美緒 (たゞうつとりと見惚れたるが、襟を捌き、膳を捧げ、するりと床に上り、且つ吸筒

を取る。)

團助 嘘では、ふん、ないやうやに。新聞で寫眞も見たげ。今月新任したのおやに。世間では

相當なもんやろが、俺に取つては、さういふものは滓みたいなものぞい。町奉行。(忽爾、尻を

まくり突出す)酒の肴や、これ啖へ。

勝行 汚え尻だな、薄よごれた越中禪、かびの生えた、たゞみ鯛だ。——お露さん、いやお美緒

の方——あれがお前さんを抱いた爺だ。

露・美緒 あれ、もうそんな事、堪忍して。

白刃を恐れず、媚態艶なり。

團助 何や、お美緒や。

勝行 其の——(間)幽霊ださうですよ。

團助 見りや見るほど似て居るに、いよく似て居るがに。幽霊でも何でも、俺の妾ぢやに。俺

が、どれほどのもんやかを示すために、裁判長の目の前で、妾を自由にして弄うてやるけ。——

女郎來せう、こりや來せう、といふがに。どうやけ。いふ事さ、さらさんと、いつも爲たや

うに其の髻の毛引つかんで、細首を捻ぢおろすぞ! (拔身を片手に、むすと割鹿子を掴まむと

する、その拳、美緒のかはすともなく、二度三度空にそれる)ありや、ありや、(氣競の發音に

あらず、度を失したる聲、あれよくといふ如し）ありや、やつぱり狐かいに。うゝ、何と
ても、こりや刀の威徳でなうてはあかん。（引かぶる。）

勝行 馬鹿。

露：美緒 あゝ、嬉しい。（深い息ほつとして）たふといお奉行様——殿様は、此のものを、二度
まで、馬鹿とおつしやいました……

勝行 あらためて、なぜ聞く。——狂人はもう少し血があり刺がある。これは取りどころのない、
どろ／＼の馬鹿なんだよ。

露：美緒 お職柄で、然う、おつしやいますか。

勝行 お職がら、法官として、天下の法として、遺憾ながら、谷郷團助は罰せられん、が、馬鹿
を馬鹿といふに差支へはない、一人としては、いふまでもない、職権にかけて、無論、憚らな
い、こいつは馬鹿だ。

露：美緒 まあ、ありがたい、（伏拜む）百日紅の樹に縛られて、切られます、我が肩、乳、手足
を見ながら、憎い敵をじつと見詰めながら、口に聲も出なかつたのは、何といつて、何といつ
て、何といつてやらうかと言ひやうがなかつたんです。言つてやりやうがなかつたんです。殿
様のお言葉で、久しい年月思ひに思った、胸が開けて、つぼんだ口が咲きました、聲の花が開

きました。面と向つて、言つてやります。構ひませんわね。

勝行 確に北畠が引受けた。

露：美緒 馬鹿。——谷郷團助——あれ何ですか、馬鹿では勢がよ過ぎます。なまぬるい國言葉

の方が通じませう。谷郷團助、……阿呆！

團助（見る／＼面色かはり茸蕪の如き厚唇を噛み）俺ほどのものに對して、方圖もないに、途
方もない事やに。言はうやうもないかはりに、家重代がものをいふ、仕置をするぞ。

露：美緒 お騒ぎでない、私は幽霊です、切れやしない、觸れもしません。（百日紅の枝を兩手に
取つて身構する。）

打込む、かはす。

突く、開く。

拂へば、伏し。

すくへば、飛ぶ。

團助を見れば、

刃の電光、呼吸の煙。

お美緒はいかに。

袖の陽炎、

姿の、蝶、鳥。

亂る、百日紅の花の中に。

——此の時風すさび、雨激し。事は急なりと雖も、兩個の動作は、靜に寂しかるべし。——

勝行 (はじめ、や、危み、忽ち安す。尙ほ、此の光景の眞か偽か、疑ひ、やがて悟れる面色。ただ聊も動せず端坐す。)

露：美緒 (かくして少時してや、疲れたる狀に、あとへ引き襖にひたとついて、兩の乳かけ、袖を組合はせに、百日紅を交叉して胸を蔽ふ。)

團助 (喘ぎ、よろけ、のめり、ふらめき、狂へる如くに、みだりに空しく刀を舞はし、斬り且つ突く) ありや、ありや、唐紙にかいた繪のやうになつたがいに。繪なら、裂ける、破れる筈やに、夢やか、うつゝやか。(ぐつたりと疲れたり) ありや、ありや、百日紅の樹に化けた。ここ、これや、これや、これや、これやがいに、(また突き且つ斬る。尙ほ咄く) これは堪らん、慰むがに、弄ぶがに、一月にして、何度やら。氣が立つと、はや、毎晩やらに、この庭へ、こそりと來ては、あの時の百日紅に、ヒヤリ、キヤリと刀をあてては、ぬかせ、ものいへ、口ききををれ、いふのやが。……(註。刀はいさ、かも女に向はず、あらぬ處、空に動くのみ) その

氣持といふものは、ぎえツ、ぎえツ、ぎえツ。殺した時の女子よりは、白い枝が、わな／＼震へる。雨がふれば葉を傳つて血が流れ、風が吹けば枝々が悲鳴をあげて、ひい／＼と泣くがに。女郎の成敗、ぎえツ、ぎえツ、ぎえツ。(獸の如ききちがひ笑ひに、五體をゆすつて、北畠に向直る) こつそりと忍ぶどころか、汝、見まつし、目の前で、この、虐殺をやつてもやに、裁判所長たるものが、ものでも、何うもし得まいに、口一つ利けまいがいに。……それこそ、馬鹿や、大馬鹿や、阿呆めが。ぎえツ、ぎえツ、ぎえツ。

勝行 (つか／＼と襖に寄り) ——美緒さん、これは煩さからう。お察しする。何故取殺してしまひません。

露：美緒 (唇動き、腫牙ゆれども、疲れたるか、聲きこえず。)

勝行 (近く鬢に觸れ、頬を寄す) 何、——飛んでもない、——思ひもよらない……何……(少間) あ、然う、然うか。團助。團助。谷郷團助。

團助 うゝむ、おゝ。

勝行 さすがだ、前の世からの仇でも、一度契つた情は嬉しい。あやかりたい。——感謝をなさ

い。此の美緒は、老人に、百歳、二百歳、三百歳、その壽を保てといふんだ。

團助 な、何ぢや、して又何ぢやてて。

勝行 いやで、いやで、いやで堪らん、他界幽境。おなじ冥途へ來られては、紅蓮に、白蓮に、蓮華に蛆が湧く、迷惑で困るといふんだ。

團助 湧く、蛆に、うむ湧いても見せうわい。——何ぢや、おなじ冥途へ來ては迷惑ぢやと、ぬかすか、女郎が、ぬかすかに女郎。女郎、した、かな雑言ぢや、さう吐かせば、ようし（大肌脱ぐ）迷惑さしたる、迷惑さしたる。谷郷ほどのものは、何やかて出來んといふことはないもんや。冥途へ行つて、目に此の團助の鼻を見せ、髪の匂をかいでやるに。百日紅の樹でさへ堪らん、白い枝幹を弄うて遣るに、待つとれえ。見ろ、ぬかした、おのれ。（かばと、白刃をおのが咽喉に貫く。とともに、つと投ぐる美緒の手の百日紅の落つる處へ、たじくと後退りし、仰向けにどゞと倒る）うむ（手足を張る時）ありや、りや、夢でない、ありやしもた、計られたか。——家來ども、子分ども皆來い……た、たすけてくれくれやい。（息……息……）

勝行（肅々と寄り、燭を取つて、時計を見る時——團助の……息絶ゆ）——二時半……

——鐘の音——

風雨ひつそとやむ——少時前、團助の蹴倒したる障子の彼方に、古案山子の如き形顯はる。蓑笠を棄つれば、脛は山法師に似てか、げたれども、袈裟、法衣、式服したる和尚なり。

卓傳（つか／＼と入來り一揖す）珍重 珍重。

勝行（禮を返す。）

卓傳 お人から御身分は、やがて承知をしたのでござつた。——拙僧はな、團助の百日紅を苛むよしを聞いて鬱陶しうてなりませなんだ。この庭のあの一樹は、實は貧寺の山から見えます。百日紅の供養のため、且は、あはよくば——這奴の鼻へ、一竹篋參らうと存じたのぢや。來て見れば、燭臺、膳碗まで、ひそめ置いた。……（床の莫蔭を取つて死骸に掛け、袈裟を脱ぎ、上に蔽ふ）箸にも棒にも、かゝらぬが、かくなるべきぢや。——あつばれ、お奉行。

勝行 天の裁判です。——私としてはお恥しい。行届きません。第一、二人が切結んだ一時は、夢のやうに思ひました。貴僧のために目が覺めたと申して宜しい。……慚愧のいたり。

卓傳 お言葉、おそれ多い。しかし不思議な事をあれにて聞いた、お美緒どのの、心霊は、團助の死ぬのを厭はれましたやうでありましたがな。

勝行 さ、その實はいかゞでせうか。

卓傳 さては貴官の術略で？

勝行 否。——しかし、とにかく、他言は御無用。

卓傳 坊主が人の密事を饒舌ると、石地藏でも鼻が曲る、ほゝゝ。

——ふはりと木菟の少女出で、古襖を開くや、恍として背を凭れたる露三郎。其の背後に、

肩を重ね、胸を合はせ袂を揃へて、美緒の幻イみたり、露三郎、心着き、はつとして、女、
むしろ人としても餘りに媚かしきまで、襟袂の亂れたるまゝ、飛寄つて、勝行に縋る。縋るを
軽く抱きつゝ、袴の膝を正す。いま露三郎の襖を離れたる敷居越に、その藤紫の切かけたる
割鹿子、衣、帯、長襦袢、年紀も、縹緞も殆ど相齊しき、美緒の姿、敷居越に、両手をつか
ふ。前後、左右に、老いたる、若き男女の幻影、七つ九つ、美緒の父母など、血縁か、或は
嘗ておびたゞしく團助に虐げられたるものの怨魂か、看客の想像に委して可ならむ。

勝行 (美緒の靈に、間。慇懃に、且つ威儀正しく) —— 迷惑でありましたか。

美緒 (白く、妙なる顔を上げて) なむ。(といふ。)

卓傳 なまいだ、なまいだ、なまいだ。(數珠を高く押揉む、低唱。)

美緒 なむ……嬉しいこと。(につこりして、しとやかに、手を仕ふる。とともに靈影皆禮拜す。)

露三郎 (其の、美緒と同じ姿に直りて) お嬉しいこと。……

—— 幕 ——

かきぬき

瀧の白糸

欣彌、金を腹掛のかくしへ入れてゐる科のうち、橋の上へ車夫現はれる。車夫は橋の欄干へ片脰をついて下を見下ろしつゝ、少し酔つてゐる。

車夫 如何ですえ車は？……お合乗で……

白糸 要らないよ。(捨てるが如くいふ。)

車夫 さう、おつしやらないでお召なすつて、へ、へ、へ、(わらふ。)

白糸 何がをかしいのさ……(と見上げて)お前合箱ぢやないぢやないか。

車夫 へ、へ、へ、そこは又お話し合ひで、どうにでもね。

白糸 お前も飛んだ苦勞性だねえ、人の事より早くかへつておかみさんでも悦ばしておやんな。

車夫 へい、大きに憚りさま……まア、お楽しみなさいまし、はッはア。

白糸 いやな奴ねえ。

欣彌 (白糸の言葉にかぶせて)おい車屋。

車夫 (ふりかへり)やつぱり、お合乗ですかね。

欣彌 馬鹿いへ。……伏木までゆくか？

車夫 いきますとも、何處へでも。

白糸 伏木まで……

欣彌 伏木迄車で、舟で直江津まで出て東京へ行かうと思ふんです。

白糸 (心を轟かしつゝ)これからつて……あんまり早急ぢやありませんか、まだ話したい事も

あるし……ともかく今夜は……(車屋に)車屋さん。

車夫 へエ。

白糸 濟まないけど。(と、紙へ墓口から金を包まんとする。)

車夫 お乗りにならねえんですか。

欣彌 乗るんだ、いつちやアいかん。

車夫 へい、ようがす。

白糸 だけど欣さん。

欣彌 でも早い方がいゝんです。やつて下さい。

白糸 (思ひきつて) ぢや無理に止めませんけど……お母さんには。

欣彌 道でよつて暇乞ひをします。高岡は通るんだから。

白糸 ぢや、町外れまで送らせて下さいな。

欣彌 その位なら別に遅くもありませんから。

白糸 さう嬉しい——車屋さん、あるいていくから歸つておくれ。

車夫 おや／＼矢つ張りひやかしかい。

白糸 愚痴をおいひでない。さ、少ないけど氣は心だ。——

車夫 御祝儀かね。——

白糸 御祝儀と云はれるとはづかしいが、そら放るよ。

車夫 へい、

白糸 (紙包を投げる。)

車夫 (手でうけとめる。)

白糸 このうち欣彌は、橋の下にある、オーバと帽子を、とつてくる科。

白糸 お待遠様——(とオーバをきせる。)

この間に車夫は紙を開いて祝儀の高を見て、

ほうつといつた調子で、腰から扇を出してのせて頂く。

二人は行きかける。

車夫 いやう二本松。

欣彌 棒枕のやうに聞えるな。

白糸 ——奥州街道ぢやあるまいし。

車夫 違ひました。イヨウ女夫松。

白糸 その通り、(と、反身に。)

車夫 相に相生の松こそ目出度かりけれ……

白糸 川音が波に聞える。

欣彌と顔を見合せて笑ふ。

——木の頭——

二十日の月影さすところに、撫子、前の場の姿のまゝ帯なし、裾をひいたる姿にて出づ。

おもては蒼い月の影。

撫子 姉さん、姉さん。

白糸 (はつとして身構へる。)

撫子 やつぱりねえさん。

白糸 誰だい。

撫子 (聲とともに驅寄り、庭に膝を立て袂をひかふ) 白糸の太夫さん。

白糸 お、生きて居たかい。小夏さん、まあよかつた。お互に思ふ男が、こんな羽目に成つたのも、三百圓が出来なけりや、お前の生命はなからうと、私やそれで氣を揉んだ、無事な顔見で嬉しいよ。それだがひるま見た時とはやはり、相手の男がかはつたらしい。(凄く笑ふ) 寝て居た内が違つたわね。

撫子 太夫さん、あなたが、瀧の白糸なら、私や小夏お幾です。御恩をうけた旦那様の御迷惑のなくなるやうにと生血の池に身を投げる氣で此處へ來ました。此處を何處だと思ひです。くるとそのまゝ、出刃庖丁の用意がないつて、衣服を脱がせて、柱に立たせて、脇の下から咽喉へまで焼火箸を刺さうとする桐洲の内なんですよ。

白糸 (驚き死骸を視むる科) え、あ、そんならこれが……三年前に淺野川の小屋で隣同士で

きいて居た、因果はめぐる小車だねえ、めぐりめぐつて今日こゝでその身に出刃がさゝるとは……これも何かの因縁だねえ、實は前刻、立ちきして、あの場の様子はよく解つた。自分は自分のからだでない、立てひいてくれた婦のからだだ。からだも心も一つだ、と、欣さんが激しい聲で、いつてくれた嬉しさに、私も男と同じ心、同じからだ、おなじ意氣で、お前を助ける氣になつたに、約束か、自業か、間違ひとは言ひながら、二人まで人を殺して、血でこしらへた三百圓、役に立たなくなつちやつた。

撫子 太夫さん！ 人は、分けて女は、死ぬより外に心の見せやうはありません。姉さん、私は死にます。

白糸 否、否、せめて、お前が死なないだけを、(金子をはふる) 私の手柄にさしておくれ。

撫子 死ぬなどお云ひなさいますなら死にますまい。さうしてこれは(金包を取り) 佛様のお教を受けます迄いゝが、お預り申します。私は門附でも、順禮でも、並木の下に倒れる迄は、あなた方二人の御壽命を祈ります。あなたも死なずにするて下さい。名乗つてなんぞ出ないやうにね。あなたは人を殺したんぢやアない。夜叉鬼婆を切つたんですから。

白糸 え、然う云つておくれたもの、二日なり三日なりせめて私はながらへようよ。

撫子 そして、欣さんは。

……月冴ゆ……

白糸 朝と宵とは違ふけれど、(月を仰いで)月は東に、明星は西に、

撫子 思ふお方を真中に、

白糸 二人で壽命を守らうね。

撫子 太夫さん。

二人手を取り交はす時に白糸の手に出刃庖丁あり。

月愈々冴ゆ。

撫子 あーッ。

袖を以て顔を蔽ふ。

白糸 ちよッ、じれつたい。

と、握つて凝りてはなさざる右手の庖丁をキツと齒にてかみ離して、トンとおのせの死骸の

傍に投ぐ。

じれつたいよの中だねえ。

鶏の聲。

通夜物語

畫工侘住居

少年 (十ばかり)どけ、どけよ、長屋の姉や、(はじめ、もの蔭よりいふ。)

小今 (井戸端に洗濯しつゝ)いま直ぐにすみすからね。

少年 どけてッたら! (洋服、驅出づ)空氣銃で此の樹の雀を狙つてるのに、ぢやばく洗濯するから、ちつともじつと留まらないぢやないか、どきやがれ! (いきなり靴にて横腹を蹴る。)

小今 はつ(ト、胸を痛む。)

お松 (かけいで)何をするんだ。(突飛ばす。)

少年 や、突飛ばしやがつたな。ぼくんちは、お邸だぞ。パパや、ママにいつけてやるから。

お松 はじめちよろく中ばッばだらう、まんまの炊き方はこつちから教へてやるよ。きれいな姉さんを蹴やがつて、そんな足は膝ぶしからをつべし折つて焚附けにするからもう一度出して

見な。

少年 何でえ、何でえ。

お松 おや眞赤になつた、燃えすぎるね、火の用心に消してやれ。(水をぶっかける、少年泣きながら遁出す) わるい小僧だ、見たがい。(小今の背を) 痛い、一寸痛むんですか、水をあげませうか。……あら! 姉さん、小今姉さん。

小今 まあ、松ちゃん。

お松 逢ひたかつたわ、逢ひたかつたわ。

小今 なつかしいねえ。(ひしと相抱いて二人泣く。)

お松 痛い。(小今の胸をさする。)

小今 乳の下だつたもんだから息がとまりさうだつたの、もう何ともありません。

お松 もう何ともありませんなら——怨むわ、怨をいふわ。

小今 あゝ怨んでおくれ、怨をきくわ、怨んでおくんないともさ。

お松 姉さんたら、小今さんたら、私にだまつて、あれツきり居なくなつちまつたんだもの。

小今 ほんとに濟まない、おつけはれて、あすこを出られないわけがあつてね、夜遁げ同様にして来たもんだからね、私も了見違ひだけれど、お前さんもまた、餘りな見當違ひぢやないか、

こんな山の中へ何うして来たのさ。

お松 姉さんが居なくなつて、さみしくつて、さみしくつて、詰らなくつて居る處へ、不斷からいひいひしたおとつさんがね、堅氣の奉公をしろつていふもんだから、やけに奉公に出たんですよ。それでね、今日はね、奥さんの用で、團子坂のきく煎餅を買ひに來ただけけれど……あのね、あのね!(大きやうに) 姉さん、おきよ、邸の旦那の、むしやく鬚といふ奴が、

小今 一寸、こゝいらは鬚だらけさ、うるさいから、何しろ、まあ、早くおはひり。ちやうど兄さんも内だから。

清 (前刻より内にて、下圖を描く。)

お松 さうだらうと思つたつけ、うまくやつてる。

小今 もう泣かないね。

お松 泣くもんか、なぶつてやる。

小今 どうもありがたう、ご馳走さま。

お松 知らないよ。

小今 兄さん、兄さん、松ちゃんが。

清 松ちゃん、何處の。(わき目もふらず、下圖を描く。)

小今 何處のぢやありません、あちらの……

清 あゝ、隣の庭の松の影か。(またわき目もふらず)此のころいつも金屏風に映る時刻さ。

小今 じようだんぢやない、仲の町の。

清 やあ、珍らしい、何うしたい。

小今 あゝ、吃驚する、大きな聲で。

清 その娘にばかりは借金がないから立派に大きな口をきくのよ、何うしたい!

小今 堅氣の奉公に出たんですつて、——(お松に)何處に居るの。

お松 小石川原町よ。

清 原町——河童が陸だ、これは失禮。なだいのお俠の難ぶつに、のての奉公が勤まりますかい。

お松 勤まるもんですか。

清 つとまるもんですかッて、お前。

お松 いまいつたその髻のもじやもじやね、それを、まあ、誰だと思つて。

小今 ……………

お松 しつこく姉さんを追ひまはして、げぢく扱ひにされた篠山よ。

小今 まあ。

お松 だから、お目見得のすぐ晩から飛出さうと思つたけど、——

またその若い奥さんが、見とれるほど美しくつて、上品で、優しくつて。

小今 兄さん。

清 (知らない顔。描きつ。)

お松 今日もお使ひの出がけに、山の手は珍らしからうから、其處いら、遊びながら見ておいで

つて、そしてね、大觀音様を教へて、お賽錢まで下すつたの。わたし、おまるりをして來まし

たけれど。

小今 お拜みなさい。(清に。)

清 (知らない顔。)

お松 そんなですから、それは私を可愛がつて、もしやく髻は、一體嫌はれて居るらしいのよ。

よく夜泊りをするんですよ、そんな時は、奥さんがね、私を一所のお部屋へ寝かして、ね、小

今姉さん、姉さんの町に居た時の事だの、兄さんが、酒の飲みつぷりだの遊んだ時の様子だの、

そんな事を聞くのをね、しみく嬉しがつて、……どうかすると私を、じつと抱きしめる事さ

へあるんだわ。

小今 聞いちや居られないね、……兄さん、兄さん。

清 いま、やきずみを使つて居る、手の離せない處だ。

お松 毎晩のやうに、手を取合つて、寢床で聞くわ。そんなですから此方も、氣を入れて、姉さんや、兄さんののろけを、澤山きかしてあげるのよ。

清 (立つて、座中を行きまはる。)

小今 何うしたの。

清 金屏風に使ふ繪の具がないんだ。

小今 (黙つて、羽織を脱いでたむむ、心づもり、髪に手をやる、櫛、簪なし。しんみりと) 足りないでせうけれど。

清 すまない、すまない、何、これさへ出来れば、久しぶりで、寄鍋とは行かないまでも、鍋焼うどんで熱燗でのめるだらう。お松ぼう、すぐ歸る。遊んで居な。お土産を買つて來るから。(つか／＼出て行く。)

小今 松ちゃん、見習つては不可いよ。極りが悪い、お茶も切れた。が、私は、それでも嬉しいよ。

お松 身體だけ大事にして。さつき蹴られた處は痛まないかい。

小今 (ためらつて、黙つてうなづく。)

お松 (急に) さあ私も歸らう。

小今 何だねえ、留つた雀が、急にパツと立つやうに、

お松 でも、よつほど油を賣つたから、奥さんが待つておいでだから。

小今 勝手によし、私は松ちゃんに寢返られた。

お松 口惜しい、姉さん、さうぢやあない。

小今 串戲さ、奉公は大事だよ。(心着く、お松が立ちがけに、ソツと抜いて破畳においた古渡珊瑚、八分珠、金あしの簪を手取る) 松ちゃん、氣をおつけ、そゝつかしい。

お松 忘れたんぢやないわ。おとしたの。——姉さん、覚えておいでかい。——(こゝに合方工夫ありたし) 其の簪は——さきをとゝしの事だつけ。夜櫻のすんだ頃、仲の町の夕景色、青葉のお茶屋の二階から、仲の町一番の婀娜といはれた、きれいな妓が、その上なまめかしい微酔で、霞を眺めて居なすつた……私が下を通りかゝると、松ちゃんお上り、遊んでおいでつたら。いや。遊んでおいでつたら。いや。すた／＼と行く足許へ、島田から抜いてソツと投げて、私の目前へ、龍宮のお星様のやうに落ちたのが……其の簪よ。たとへ珊瑚水晶をたどんでも、町の煮豆屋のお松ちゃんが、そんなで足留めがなるもんかと、振向きもせずに、勝手に遊びに行つて了ひました。あとで、私が悪かつた、買った時が三百圓、せつかく遊んでおいでといふのに、憎らしいから、お寶で足を留めようとした、氣障を堪忍して頂戴……あらためて、

あやまるから、松ちゃん不斷ざしにしておくれよ。氣前を見せぶりのわが身の氣障さに寒氣が来て、ゾツとして煩ひさうだとおいひだつた。私は簪を投げたより、そのあやまられたのに涙が出ました。——忘れたんぢやない、おとしたんです、おとしたものは、おとしたものは、小今姉さん……後生だから。

小今 拾へかへ。

お松 氣障かねえ、それだと私も煩ふわ。

小今 拾はしておくれ、お前さん、何にも言はない。氣がつかずに居た櫛、簪、つむりにさすものだけれど、はじめて私はいたくよ。(いたゞいて髪にさす) 松ちゃんは、張と意氣地の氏神だよ。

お松 氏子でさあね。すつと場末の溝端の、御神燈に蠟燭一本、何にも出来ない氏子だけれど、時節が来れば景氣のいゝお祭は屹と来るよ。あ、仲の町一の姉さんが。(ほろりとしながら) わつしよ、わつしよ。(勢よく花道へ。)

武田の婆、(やり手上りの小金貨、革製の信玄袋を持廻る、あだななり) 出淵といふ代言まがひの袴ばきの老人と、小氣轉らしい若いもの三次と三人づれ、花道にて行逢ふ。

お松 おやゝ武田のお婆さん、名代の革の信玄袋で、借金とりに行くのなら、——小今姉さん、

清兄さんも、人間も、道具一式、衣ものも、箆筒もない、茶道具も何も無い、内の中はからつ

ぽだよ。さやうなら。あばよ。(いひすて行く。)

武田 あばよ、が、ばよと聞こえらあ。あの阿魔女め。

出淵 何ぢやね、何ですかね、あはは。

武田 よし原中をのして歩行く、田町の煮豆屋の娘だがね。おはぐる溝のぼうふらだよ。

三次 飛んだ處を歩行いて居やがる。

出淵 とぶ筈ぢや、蚊になつたんぢや。

三次 道理でちくりと刺しやがつた。

武田 そろゝ生血を吸つてやらう。はい、ごめんよ。

小今 あれ、お婆さん。

武田 武田の女旦那といへ。何がお婆さんだ。……最も、三途川に網を張つても、お前たちは、まつすぐに冥途の道も通らねえ、よたゝあるきの大それた駈落ものめ。半年ぶりで、漸と見つけた。おいらも、小紫の半襟ごろから、よし原で次郎左衛門の豆いりか、八ッ橋を茶うけにして、すがゞきで、茶をのんでの、十六夜にうたゝねか、明がらすでくしやみをした女だ。色出入や道行にもんくはいはねえ、が貸したものは、

小今 何とも申譯はありません。合はす顔もありません。

武田 顔は合はせると、女でも惚々するがね、お金に逢はないと氣味が悪い。床急ぎの言ひぐさ

ぢやねえが、早く懷中へ障らしとくれ。そのかはり勤さへすませりや、さつぱりとしたものだ、

宵立ちどころか、晝遊びの上客だあな、は、あとは、色男と抱きつくなり、くひつくなり、

小今 唯今、るすでございます。せめて宿のかへりますまで。

武田 あつかましいよ。雄どりの歸つて來るまで、あつけらかんと、巢の下に口をあけて居られ

るものかな。

小今 其處をどうぞ、此の通り、手をついて。

武田 おや、い、道具をさしてゐるね。(すつと簪を抜く。)

小今 あれ、それは。

武田 うむ、乙姫様の鬼灯でも、かうは行くまい。が、賣るとなりやいくらしねえ。こんなこ

ツちや利息ばかり、元金フイだ。どうせ、からつぽは知れてるから、其處らのものを搦んで引

か、う、(みまはす)おや、おや、おや、おや、金屏風。三次引背負つて。こうばいがのろいぢやないか。

三次 ですがね、無やみと持出して、また、あとくが。

出淵 そのためこの法律家がついとるんぢや、大丈夫ぢや。

武田 それにね。身ぐるみ脱いだつて、公事沙汰にするやうな、そんなんぢやないよ、そこは仲

の町の小今さんだ。

小今 でも、格別のおめがねで、お頼み下すつた、ある御ひいき、玉川もこの二月三月、それを

、樂みにして、夜の目も寝ません、いまま繪の具を、

武田 うるさいく、四の五のおいひでない、さつさと三次、擔ぎ出しな。

三次 合點だ。(驅出す、遮る小今を、出淵つき放しあとを睨め睨め出る。三次眞先に花道へ、武

田婆つゞきながら、一寸留り、信玄袋から簪を出し、あけ鬢の小さな鬘へさして、抜き衣紋で

ニヤリとする時、三次と出淵にあとさきより、じろりと、いやな顔で見られて、慌てて袋に捻

ぢ込み、じゃけん、ぐつとしめる。かくして皆揚幕へ。)

小今 (たゞさしうつむき思ひ沈みたるが、かくてはならじ。臺所口より走り出で、はだしにてあ

と追かく。)

お澄 裏手よりあとさきを見つ、人目を忍ぶ状にて門に寄る。あとくをのそくとつけ

たる鐵六、大に酔つて居る、ひよろりと臺所口より入り、もの陰にて窺ふ。

お澄 (はゞかりありげに)ごめん下さいまし。

鐵六 へい!

お澄 (しるる。)

鐵六 へい、これは、入らつしやいまし、誰方様で。

お澄 あの、玉川さんの。

鐵六 え、手前ども、手前どもでございやすとも。さ、さ、まあ、まあ此方へ。へい、へい。

お澄 あの、おうちに入らつしやいますでせうか。

鐵六 へい、へい、それがね、生憎一寸出掛けて居ります……といった形で。

お澄 では、お留守の方で入らつしやいますか。

鐵六 留守——なあに、留守番を置くやうな屋臺骨ではござりやせんがね、丁ど來合はせました、その、手前、山の神のおやぢでがしてな、はッはッはッ。山の神のおやぢといふと、狒々が化けたやうですが、へッへッへッ何う仕り……氣立は佛……はてな、山の神の事だとすると、はてな、六根清淨、え、ざつとかんぬし見たやうなもので、はッはッはッ。其處で、あなた様は。

お澄 は、あの、清さんの少し御存じのものでございます。

鐵六 あッ、たふとい。ありがたい、少しでも澤山でも、御存じのものといふ、昔から色戀にはそのござんじが身上でございやすな。ま、ま、何しろ此方へ。

お澄 さうもいたして居られませんかのですけれど、少し、あの、おことづけものが。

鐵六 おことづけ、へい、へい、うやまつて、承り奉り置きますで。

お澄 いえ、あの、ほんの心ばかりの品ものを。

鐵六 お品もの、それは、へい、へい、へい、眞に、どうも、へい、申すもいかゞでござりやすが、手前、名は鐵六で、長屋の溝は石橋を渡りやす。その上、人様の印行、印判、事とすべによつては生命にもか、はります首とつりかへの實印を扱ひまする代書人。一天地六、賽の目も見そなはせ給へ給へ、凡そ世の中に、このくらゐ、信の置ける堅い親仁はござりやせん。何なりとお預け下さりやして。

お澄 (包を解かうとして、袱紗のま) 失禮でございしますが、このまんま。

鐵六 お袱紗のま、あ、お見事な。あ、結構、あ、い、匂。

お澄 何ですか、途中、いそぎましたせですか、胸がわくわくいたします。おひやを一口。

鐵六 え、お湯なりと、いや何にもねえな。お、湯呑が、

お澄 それは、奥様の、お使ひ遊ばす、

鐵六 遊ばして、轉ばす處は、へい縁日のおためしの代もので、へい。

お澄 知らぬ女が口をつけまして、お氣味が悪いといけません。ほかに……

鐵六 お言葉で、罰が當りやす。が。(首をふつて頷く)えへむ。(軽く)然らば、此のはうで。すつきりした、い、男の清さんのでござえやすよ。

お澄 (ほんのり色を染め、うれしく、なつかしく、かなしさう)い、え、その組皿を、一枚どうぞ。

鐵六 組皿、え、はあ、これかな。些とばかり繪の具がついて居りますぜ。

お澄 私が、いすぎます。(態度急にそはくと、臺所へ入る。)

鐵六 あ、お人がらんと紅猪口をお含みなすつたやうなあんばい。

お澄 (組皿を鐵六の手に返しながら)何をおつしやいます。でも、此の繪の具を私の手でとくやうでございましたら。

鐵六 え、え。

お澄 あ、おいしうございました。

鐵六 や、した、かな御挨拶、恐入りやす。へい、へい。

お澄 しつれいをいたしました。

鐵六 お氣をつけなさいやし、悪い犬は居りやせんが、木の葉が散りやす。あ、お綺麗な。

お澄 お水に酔ひました。(洋傘に顔をかくして行く。)

鐵六 (見送つて、すぐと引込む)あ、女のうつくしいのは可恐しい。おれほどのものが、肩が張つた。酔もさめかけた、ウーイ、おくびを堪へてるつらさといふものは。……天人と口を利いてるやうだつけ。いや、畜生、惚れてるな、清の野郎、何がよくつて、おらが阿魔までしに身で居やがる。別嬪二人、人別戸數割の税金だ。安いもんだ。(袱紗づつみをつかんで汚い舌をペロリ)いや山の神のおやち様、此の位のお賽銭は當り前だ。(ちよろり臺所を出て消える。)

小今 (井戸の裏より、悄然として、ものおもひつ、出で、バケツを手に、しをくと勝手へかかれる。)

清 (つかくと花道より、門口より入りつ、臺所より出てくる小今と、たそがれにほの白く顔を見合はす)お松はどうしたい。

小今 兄さん——お松どころなものですか、申分けがありません、私どうしよう。さつき二人まで加勢をつれて、あの武田の婆々が來ましてね、

清 (ぎよつとして)や、信玄袋か。

小今 大切な、そして何よりも兄さんのお仕事の、金屏風を引さらつて。

清 (うなる)南無三。とられたか。

小今 方にも意地にも我慢にも何うにも仕やうがありません。あたし、死にたい。

清 馬鹿を言へ、お前の無事なのが私の生命だ。が、よくくのぶまだなあ。金銭のない事にか
けては、海道一の弓取が、味方ヶ原の大敗軍だ。

小今 何ですなえ、海道一の弓取だなんて。

清 徳川家康の若い時だよ。濱松の城の門に櫓を立てて楯籠つた、處で茶漬を三膳くつて、手枕
で寝たといふがね。

小今 その時、女房、あの御臺様はどうしたの。

清 弱つた、其處までは、歴史の本でも講釋にも知らないがね。何しろ、腹がすいた。慌てらや
不可い、こんな時は、たゞ引被つて一寝入りする事だ。(どさんと倒れる。)

小今 (心ならず、押入よりせんべい蒲團、やれ袋——枕。)

清 (敷いたのにころがり込む) お前は何うする。

小今 お雑炊でも拵へますわ。

清 米は。

小今 まだありますよ。

清 (うすくらがりを手探りに) 枕は一つかい。

小今 え? はい、ほ、ほ、ほ、(さみしく笑ふ。)

配達夫 電報。

小今 (すぐ受け取り、匆ね起る清に渡す。)

清 (すかして讀む) や、おばあさんが、キトクだ、大變だ。

小今 え、何うしませう。

清 慌てるな、お前も一所に。え、見得も恥も外聞もあるものか、お前の事を、よく知つて、
ひとつうちに住みたいといった上に、今までに一言でも嫁といつてくれたんだ。——支度をし
な、支度をしな。

小今 支度にも何にも、(ときたきりで、うろく、清もともにうろくする。)

少年 (少年、つれをさそひ、二人三人にてもよし。ソツと出で、門を細目にパシツ礫を投げうち、
續いて投げうち。指にあたる。)

小今 あいた。

清 や、何うした。(心着く)この野郎、(少年飛んで遁ぐ。追はず、清、歎息してどうとすわる)
子どもばかりでするんぢやない。世間八方、石を打たれる、小今さん、お衆堪忍しておくれ。
仲の町に居さへすりや水道尻から龍になつて、馬車、車も一呑みに玉の輿でも蹴破る女が、私
の女房になつたばかりに——

小今 胸がうづくわ、あ、嬉しい、はじめて聞いた、女房といはれたばかりで、私は此のまゝ死んでも嬉しい。
——胸に縫るを確乎と抱く。——

湯島詣

序まく(一) 入谷松源の場の幕あきの所作事

楊弓の女三人 夕化粧、結綿、つぶし、投島田、あだな姿も、そらどけの、そろばん紋り、商賣に、氣は張弓や、楊弓の、趣向も不思議、當つたり。
傘 闇夜の礫、それならで、へうと矢響き、射つけたは、ばらばら雨の、破傘、おいてけ堀の錢はなし、片葉の蘆の岡場所へ、橋の數々、潯標、ふり出す雨や、さす汐も、
楊弓の女 一つ目、三つ目、うしみつや、あたりました。
河童 おや、お客だよ。おくり提灯、人だまの、あかりに、振りも、くにやくと、袂を曳いて、もし、お遊びな、おいやかえ、かつばづかしい、と口元を、かくすも浮葉、手のある女。
傘 馬鹿囃子イ、その面は。
河童 さういはいしやんす、お前のなりはえ。

傘 コレ紙子さばりが、荒い。荒い。そこは尻尾だ、擦つてえ。

河童 何だ狸か。おれはまた、女郎に化けて一なぶり。

傘 河童か。

河童 かつばだ。

(かつばツばつば、かさくかさ、ニタニタ、ケタケタ、とも笑ひ、をかしくも、また、おそろしき)

手れん手くだの浮世形、六枚屏風の狂言も。

こゝにてまた一人射て當つ。

五條の橋の切結び、勝手よきほどにて、踊の師、壽吉、一度聲をかける。

一寸氣に入らない處がある、もう一度。

二度めの立まはり佳境に入る時、いそぎの使の若い衆顔を出す、蝶吉の抱へぬし、引手茶屋の女房、老妓、後見の一人なるが目早く見つけその耳打をきく。

壽吉、けはひを察し自ら體を其方に向け、後見——女房——を引きつけて、また耳打をきく。

壽 稽古、待ちな。

といふ。立まはり即時に留むと同時、

後見 それには及びませんのに。

壽 お蝶ぼうのおふくろがあんばいがよくないさうだ。

蝶吉はつとす。

歌 すぐかけつけておいでだらうね。

後見 そんな勝手な、ほかの組へのおつきあひ、皆さんの前もあります。

歌 でも、蝶さんは、そればかりを苦にして居る處ですから。

後見 こゝを立つて、我まゝにはなりませんかね。

蝶 (聲せまりつゝ) 稽古をさして頂きます、どうぞ、稽古をさして頂きます

後見 不斷鼻はしの強いのが用に立つた、さすがだよ。皆さんどうもお邪魔さま、さあお續けなすつて。

壽 いや、不可え。日頃心がけを聞いて知つて居る。他事と違つて、たつた一人の母親の病氣だ、

急いで行きねえ。

蝶 お師匠さん。(涙ぐむ)でもおかみさん。

後見 何しろ、お師匠さんが、あ、おつしやるんだから。
歌 早く着かへて。すぐ、急いで。
蝶 あい。

起つ襖際について行き、歌、紙入を授く。
そつと頂き、蝶、うける。

歌 いつもする近道で、この庭を突切つて、怪我をおしでないよ、池へなんぞ踏はずすんぢや
ないよ。

蝶 池もだんの浦も八艘飛びよ。
出る。

後見 あれだもの、おてんばに呆れつ了ふ。

歌 心ちや泣いて居るんですよ、かはいさうに。(ほろりとする。)

壽 お歌、やさしいな、もらひ泣きをしさうだが、病人に泣くのは縁起でない、さ、さ、陽氣に
陽氣に。

— 舞臺廻る —

序まく(二) 入谷松源裏手

靈算の婦——千原數木

婦 姉さん、姉さん、一寸お待ちなさい。

蝶 あ、私。

婦 はい、呼留めて、お氣の毒な、姉さん、いまお前さんは、いま差迫つた急用がおあんなさる、
それも、もう分つて居ます。數の上に顯はれました。そのわけは、私は算盤でうらなひをする
ものです。

蝶 知つて居ますわ、廓へも時々おいでなさいます。お上手ですつて。

婦 それはお恥しい。けれども、上手、拙さはさておいて、神佛の自然のおつげだと思つてお聞
きなさいよ。希代な事は、お前さんとすれ違つたと思ふと、私の胸へ、手で弾いたやうに珠の
數が動きました。運勢が見えたんです。こんな事はありません。もう一度いひますが希代なこ
とです。あらためて算を置直して、運勢を知らせてお上げ申したい。

蝶 心配な事があるんです。え、どうぞ。
婦 おしつけ業を、すなほにおき、下すつて、私も嬉しい。手間はとれません。(つゝ、みを解き算

盤を取る)一の段。一、と二と、二一天作の五。むかし名奉行、大岡越前守様が、用あつて、勘定方をお選出しになりました話があります。誰、彼、其の頃の上手、達人といふのを、一人一人、まあ、今でいへば試験をなさいましたとき。試される方は、出世の首途、それについては、微分とか積分とか、どんなむづかしい問が出ようと、かたづを呑んで控へますとね。なにがし、それがし、百を二つに割ると幾つになりますか、とおき、になる。をかしさも、をかしかし、あつけなさもあつけなうござんすね。言の下に五十と答へたのが皆なお取上げになりません、落第です。高橋三十郎といふ小身ものがお前へ出ました。おなじことを大岡様がおき、になりました、百を二つに割ると幾つになりますか。其時高橋三十郎が謹で算盤を拜借いたしたい。その算盤を麻上下でちゃんと据ゑて、一と置く、二と置く、二一天作の五、と珠を弾いて、五と申したのに、はじめて莞爾とお領きになつて、はじめて、すぐに、お召出し……後にお勘定奉行となつて、高橋伊賀守と任官をしたが其の人です。夜の路端、藪だたみの前でかういつてはお恥しいが、私はその人の孫子の末です。御先祖は噺簀にも棒にもより、そろばんに合はぬと思召しておいでなさいませうね。長刀の一手も教へた新娘の時もありましたのに、これも不了見な心からです。むだつ事をいひましたが、これも姉さんへのいましめです。算盤に出て居ます。数は大切です。いま更めて算へて見ます。(微細にしかし非常に迅速に運算す。カチ

ン、と置く)以上、あ、いはぬ事でありませぬ。姉さん、いま、お前さんの身體は居所の仲の町が行詰つて、西とか東へ、動かねばなりません。底を割つていへば、すみかへといふことです。東とすると、方角は柳橋、芳町邊、西へ向ふと、近い處は下谷すきや町、同朋町、あ、螢が飛びますね。眞黒な池の上を、蒔繪のやうに。まあ、算盤の珠が二つ並んで、光つて見える、螢の影か、蠟燭のあかりの加減か、(提灯をフツと消す)お、やみにも消えず、一つは碧く一つは紫かと思ふ色に、あれ不思議な、まあ、うつくしい、まあ、きれいな、一つは男、一つは女、これがあなたの行末らしい。

蝶 まあ、うれしい。
婦 しばらく、(深沈に)きれいな、うつくしい、輝いた星二つ、まあうれしい、それがお前さんの氣性らしい、いまいひました、西へ行くと此の運勢、それを、たゞ輕はずみに嬉しいではすみません。生きた人間が星になる、といふと命の處は何うなります、よく考へねばなりません。
蝶 かまひませぬわ、死んだつて。
婦 え、若氣な一方、それはしかし不心得といふものです。が、さういふ私もその不心得、ただし、星どころか螢でもない。路端の石ころなり、その池のうきくさ、うき藻、その藻がくれのわれからとて、ナ、貝か蟲か、知れないやうな、これも、よいいましめですよ。

蝶 うらなひのお師匠さん、立派だわ。それよりか手鍋大すぎ、門づけ結構、うつくしい星のた
めなら、ほゝ。まあ嬉しい。西へ行きます、冥途へでも。

婦 飛んでもない、第一極親のお身寄、お母さんがおありなさいませうね。煩らつて。

蝶 その母が遺言、ごめんなさい、あれ、つるかめく、不斷から男は自分で見立ろ、といふん
ですから。

婦 その見立やうが大切なのです。方角は西。東。ものには裏おもて、うらなひには陰陽がある
んです。東へ、柳橋芳町の方へおいでなさる、と、星にかはつて、お前さんは眞晝間になりま
せう。が、透通るやうな空が晴れては居ないで、いつて見れば、梅雨の氣候、おつかぶさつて
うつたうしい、それとて、もののうるほひで蒸す、そだつ、しげる形。百萬長じやに縁があり
ます。最もその人間は、その男は、かびて居るかも知れません。暗いけれど、算盤の裏をこら
んなさい。年月日、求之、改之、男に買はれる身の上ですね。

蝶 大きらひ、もうよして。

婦 何事も約束でせう。さ、もう、お急ぎなさい、飛んたてまざへをしてすみません。何の、何
の、お鳥目、私のすきでしました事、算盤の神様へは、私の方でお賽もつを獻じます。
蝶 をばさん、いづれ。

婦 くれぐれもかるはずみをなさるなよ。

あぶれもの。お蝶に抱きつく、つきぬける、からむ、はらふ、しつ拗に迫る。ぬけ、くゞり、
つきのける。

尙ほねばりつかむとするを、婦、馬乗提灯の柄にて一あてあてる、あぶれものぼつたり倒る
る。

蝶 (花道にて) いけすかないよ、おたんちん、仲の町の御曹子、牛若を知らないか。ほゝ、

(笑ふ、直下に、下根岸の方を望むおもひ、むねをせめ、色をかへて) おつかさん、なほつて
頂戴。(もろ袖を顔にあて、はつと泣きつゝ、揚幕へ。)

起上るあぶれものを、もう一あて、其ののめるを片膝に折伏せつゝ、婦、すまして、蠟燭に
マッチをあしらふ。

—幕—

源二 頭、覚えて居ねえよ。(ぶりくして早足。)

頭 はッはッはッ、もう忘れた、此の頃は、ぼけて、どうも、みそかの勘定を第一に忘れて不可え。きつけに、(ばあさんに)その薄荷糖でも貰はうか。

媼 かしら、お宗旨が違ひはしませんかね。

頭 何、これで、そこらの小兒にやる間がなけりや、結構泡盛のつまみに成る、むかしのお職の取看、ありがてえ。どれ一つ廊下蔭でもやらかすか。……廊下蔭、はッはッはッ、手前から身上を打まける奴さ、はッはッはッはッ。

男坂へ、忽ち恭屈禮拜、膝に手を垂る、までして、参道を横に通る。

上月出づ。

おなじく 湯島境内の幕切

歌 (女坂を上る) おや、蝶ちゃん、おまるりかい。

蝶 あ、おかみさん。

歌 何をぼんやり見とれて居るのさ、いまの上品な容子のい、人だらう。

蝶 御馳走さま。

歌 どつちが御馳走さ、朝つばらから。

蝶 でもね、あのね、いまの方の羽織の紋、い、のねえ、何てんでせう。

歌 私もすきさ。梶の葉といふんだよ。以前は、七夕様の時、その葉をきれいな五色の絲巻にし、織姫様、お星様にね。

蝶 お星様、五色の絲、きれいな……紅、白、紫、緑、(おも入)まあ、嬉しい、私もあの紋にしようか知ら。

歌 勝手におしよ。

蝶 こゝらに落ちて居やしないか知ら。

歌 何がさ。

蝶 梶の葉よ、木の葉でせう。

歌 あ、あるとも、それ、そこに、

蝶 え、

歌 おつこちてるのはお前さんぢやないか、確乎おしよ。

蝶 あら、姉さん。私のおつこちるのは構はないけれど、ぶつかると、あの、きやしやな方が怪我をするわ、後生。

歌 お謹みなさい、御境内をも憚らず、さあ、おまゐりをしよう、一所においで。

蝶 私もおまゐりをしたんですけど。

歌 何度だつていゝよ、おまゐりは。その容子ぢやお百度をしかねないんぢやないか。

蝶 あい。ほゝ、ほゝ。

水番 水錢をおくんな。

蝶 (水錢を置くとともに、其の、奉納の手拭のはしを、うつとり手まさぐる。)

歌 存じて居ますよ、お前さんの手拭は。

蝶 いゝえ、何だか梶の葉の形に見えて来たわ。

歌 何がえ。

蝶 あつささん、いゝ名だわねえ。

歌 まあ、もう名まで知つて居るのかい。

蝶 勿論。

歌 すばやいね。

蝶 八艘飛。

歌 水をぶつかけられない要心おし。

蝶 あら、かんにんして。(木がくれにひらりと身をかはす。)

歌 (清き手ふきを袂より、白く手に取り) 早くおきよめ。(と莞爾する。)

三幕目 上月の邸

夫人、盛装のまゝ室に入る。上月、目にて迎ふ。學士一寸會釋す。

夫人 失禮。やつと慈善市をすませました。華族會館からですから、馬車でもいゝ加減くたびれました。

いひかけて、武勇傳耽讀の若狭、酒の時も、たゞ黙して杯をあげたるのみ。夫人の入來れるに、顧みだもせざりし、其の卓の上の活字本をさしのぞく。

夫人 ごねつしんですこと、何の御本。

柳澤 無名氏著、岩見重太郎武勇傳であります。(笑ふ。)

夫人 まあ、大學院で、國史專修のお方と承りましたのに、稗史、野乗の、しかも悪繪具の、
ボール表紙。

龍田 ですが、狒々を退治る處なぞは、痛快で堪りませんよ。

柳澤 おい、たしなめ、狒々を退治る、おなじことを、レデイの前だ、人身御供を助ける、とな
ぜいはない。

龍田 狒々が何だ、支那には、女虎——女寅といふ役者ぢやないよ。女虎といふ言葉があるん
だ。

夫人 (や、色をなす。)

柳澤 西洋では、豹をうつくしい人にたとへますね。子爵夫人、失禮します。

龍田 何にしる岩見重太郎は武者修業の中がよかつたよ。

柳澤 おい、其の武勇はかへりに牛肉屋であらはずがい、さうだらう、若狭。

若狭無言のまゝ、書をふせ、靜に懷中しつゝ、莞爾として友に續いて出づ。上月、送つて扉
を出づ。夫人一人居る時、窓に半ば見ゆる鳥籠を認め、つかくと寄り、じつと見る。上月
歸り入る。

上月 あゝ、その鶯は、はやくあなたに見せたかつたんですよ、庭の櫻の中から、不意に飛込ん

だのを、此のね、羽織を脱いで伏せたんです。

夫人 野鳥、野育ちの鳥ですね、何處を、どんな處を傳はつて來たか知れない、こんな汚らしい
ものを。

上月 いゝえ、しかし、

夫人 しかしではありません。お好きなら、おいひなさいまし、きれいに飼育した高金の鶯が何
時でも買へます。あなたは、かういふ、素性の知れないものをお愛しになる悪い癖があります。
いまのお友だちだつて野鳥に似て居ます。戦國だと野武士です。これも野武士の雛子です。こ
んなものを、祖父の代から傳はりました高時繪の鳥籠へお入れなすつて、汚らしい。(はじめよ
り籠に鶯はあらず、夫人の言葉と氣組にて現すのみ。と此の時、しぐさばかりにて早く戸を開
け、籠わきを掌にて打つ。)

上月 あゝ、斷りなく、飛ばせました。あまりしたいまゝをなさる。(氣色ばむ。)

夫人 あまりしたいまゝとは私ですか、私ですか、私ばかりですか、(つゝと寄る)あなたは、あ
なたは、汚らしい、賤しい藝妓を。

上月 えゝ、(とおもひいれ)ついでに、私も放り出すがいゝでせう。

夫人 (唇をかみ、涙をおさへ)何をいふんです。いけません。わたくしは、わたくしは、あな

たを、あなたを思つて居ればこそですよ。

姿くづれて、上月の肩を抱く時、侍女出づ。

侍女 おく様、おめしかへ遊ばしませ。

夫人 (急遽姿を正しくし、ツンとして室を出づ。)

驚なく。

上月 (額に手を置き沈思したるが) あゝ、とにもかくにも、私はあやまつた、鳥は樹に居るの
がよかつたんだ。

また驚なく、窓より、櫻さつと吹込む中に――

――幕――

大詰(一) 谷中の寺の場

上月 (讀唱す、雨月。――) 寺に入りて見れば萩尾花のたけ人よりも高く生茂り、露は時雨めき
て降こぼれたるに、三つの徑さへわからざる中に、堂閣の戸右左に顔れ、方丈庫裏に繞りたる

廊も、朽目に雨をふくみて苔むしぬ。

小僧 お茶が入りました、殿さま。

上月 あゝ怪我にも殿さまはよしておくれ、お寺の居候だ。急に御經を習つても追つかないか
ら、墓掃除か、手つだひか、風呂の下でも焚かうといふんだよ。

小僧 えへ、(黙つて笑ふ。)

上月 いや、眞面目だ、お茶をありがたう。方丈さんは。

小僧 他所へ出ました。

上月 お歸りになつたら、お目にかゝりたいといつておくれ。いよく風呂焚きの相談だ。お小
僧、加減はどうだ、あついがいゝか、ぬるいがいゝか。

小僧 ちやうどのみ加減です。めしあがれ。

上月 お茶でもあがれか、やられた、御馳走さま。

小僧 大福を奢つて下さい。(笑つて入る。)

上月 (再び讀唱) さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の(寂
しく燈火をみる) 僧俗ともわからぬまでに髭髪もみだれしに、葎むすぼふれ、尾花おしなみた
る中に、蚊の鳴くばかりの音して、ものとも聞こえぬやうに、まれく唱ふるを聞けば――

江月照松風吹、永夜清宵何所爲。

や、聲高く唱する時、

一僧 (襖をあげつ、) みだい様が、御前にお逢ひ遊ばさるゝに、何、御遠慮がござりませう、
さあこれへ。(座敷へ導き入る。)

夫人 (つと上月と相見る、ともに端然として手をつく、無言。)

上月 (座蒲團を退けて、おなじく謹で會釋を返す。)

夫人 お久しい。—— 理知も意識も忘れしました、あなたがたゞ、おなつかしい、邸へお歸り下さ
います。(手をついていふ、高尚なる圓鬚。櫛、筭あひかなふ、左右に侍女あり。)

老女 (一膝すゝむ) 殿、あなた様の思召しにかなふやうにとて、ごらんじやりますし、御結婚の
式の當夜も、洋髪で遊ばしたのが圓鬚のこのおぐし。おわかりになりましたでございませうね。
すぐにこれからお歸りのほどを願はしう存じます。

侍女一 殿様、あの、鶯も、二羽も三羽もお飼遊ばして、いつも奥様がごらんになります。おき
きになります。

侍女二 一羽はよく馴れました、いつかお庭から、飛込みました、丁ど朝の其時間に、籠を出ま
して、お座敷うちを遊ぶのでございます。奥様のお心づくしでございますわ。

上月 (さしうつむく。)

老女 これ口さがない、何の事ぢや。

夫人 (再び) どうぞ。私とこいつしよに。

上月 分に過ぎます。冥利のほどが可恐しい。

意のや、動ける色見ゆ。

老女 (と、腰元にくくばせす。)

侍女一、二 (同音) お馬車も参つて居ります。

腰元一、二 (同音に) おたち。

馬の嘶く聲。

一僧 (にこやかに) 無病長壽、無病長壽。お家の榮えぢや。生憎住職は他出なれど、席をかへ
て、御一同、一先づ御休息、粗茶一つまゐりますやう。

お悦 (歌枕の女將、縁側より、遮る小坊主を引拂ひながら) お留めでない、お留めでない、坊
さんなんかの知つた事かい。いゝえさ、坊さんなんかの手にかゝつちや堪らないと思ふから騒
いで居るんだよ。(ハタと夫人を見る、上月と、夫人と、三人心々に屹となり、面を見合はす)
上月さん、兩方の手を膝において坐つてなんぞ居る場合ですか、蝶坊が、蝶ちゃんが、人も殺

しかねない、自分でも死にかねない、凄^{まじ}い血相^{けつさう}で飛出^{とびだ}したんです、その行方^{ゆくへ}が知れないんだよ。それも、これも、あなた戀^{こひ}しさから起^{おこ}つた事です。みんな目の色^{いろ}をかへて搜^{さが}して居^ゐます。さあ、すぐあなたも来て下さい、搜^{さが}して下さい、抱留^{だくご}めて下さいよ。

上月 (や、ためらひつゝ、決然^{けつぜん}として) よし、行^ゆく。

お悦^{おえつ} かういつてるにも氣^きがせくんです。(上月^{かづつき}の手^てをとり引立^{ひきた}つる。見て遮^{さへぎ}る僧^{そう}を振^ふはらふ) 氣^きは八方^{はつぱう}へ、一足^{いっせくと}飛び。心^{こころ}あたりへ飛^とんでるんぢやないか。え、坊^{ぼう}さんたち、まごころするまに、鉦^{かね}でも木魚^{もくぎよ}でも銅羅^{どうら}でもたゝいて、蝶^{てふ}ちゃんを呼^よんでおくれ。投^{なげ}出した魂^{たましひ}のやうに、月夜^{つきよ}を蝶^{てふ}々が迷^{まよ}つて居^ゐるんだよ。上月^{かづつき}さんも、羽^{はね}を生^はやして飛^とんで下さいよ。(急遽^{きふきよ}入^いる。)

上月 (周章^{しゅうしやう}す、起^たち、居^ゐつ。)

夫人 (じつと視^みるうち、血^ちつめたく、おもて青^{あを}く、且^かつあはれみ、且^かつ輕^{かろ}んずる色^{いろ}あらはる) あはれな方^{かた}、かなしい人^{ひと}。(冷然^{れいぜん}として襖^{ふすま}を出^いづ。出^いでつゝ、一度^{ひと}願^{ねが}ふ時^{とき}、口惜^{くちを}しさと、慕^{したは}しさと、氷^{こほり}の涙^{なみだ}、まぶたをあふる。)

みなつゞく。

一僧 (これは、おたちか、無病長壽^{むびやうちやうじゆ}、無病長壽^{むびやうちやうじゆ}。)

上月 (一人^{ひとり}あり。經机^{きやうづく}をうち、つと立^たつ。)

讀唱^{どくしやう}。

江月照松風吹

永夜清宵何所爲

禪師^{ぜんじ}見たまひて、やがて禪杖^{ぜんざう}を拿^{とり}直し、作麼生^{そもさん}、何^{なん}の所爲^{しよゑ}ぞと一喝^{いつかつ}して、他^{かれ}が頭^{かうべ}をうちたまへば、忽^{たちま}ち氷^{こほり}の朝日^{あさひ}にあふがごとくきえうせて、

頭髮^{とうはつ}をむしり懊惱^{あうなう}しつゝ、

かの青頭巾^{あをづきん}と骨^{ほね}のみぞ草葉^{くさば}にとゞまりける――

且^かつ誦^{しやう}しつゝ、庭^{には}を出^いで、樹立^{こたち}をくゞりつかくて花道^{はなみち}を一度^{ひと}揚幕^{あげまく}に入る。

(入^いれちがひに)

靈算^{れいざん}の婦^{をんな}。靜^{しづか}に揚幕^{あげまく}より出^いづ、七三^{しちさん}のあたりまで、其^その歩^ほのうつる時^{とき}、上月^{かづつき}急^{いそ}いで出^いで、近^{ちか}と寄^よつて一禮^{いちらい}しつゝ、且^かつもの蔭片^{かげかた}わきの心組^{こころぐみ}にて揚幕^{あげまく}を指^さす。靈算^{れいざん}の婦^{をんな}、禮^{らい}を返^{かへ}し、意^いを得^えて莞爾^{くわんじ}として、相携^{あひたづさ}へ、ともに揚幕^{あげまく}へ。

大詰 (二) 入谷松源の池のほとり

蝶 (幕あくとともに夢の遊ぶ如く池の汀をさまよひつゝ) まあ、嬰ちゃん、(紅蜀葵を折つて抱く) 寒いでせう〜。(ひとへ長襦袢の袖を引切つてかい包み胸に押しあて) おながが空いたわね。お、よしよし、さあ、お乳い。(や、襟をあだけける) あれ、擦い。——ほんたうは、お乳なんか出ないんだもの、堪忍よ。お小遣が少しあるから、お前のおとうちゃん、(泣く) おとうちやんの、気が利かないわね、お酒でなくつて、でも大すきな甘いもの、桃山をね、噛んでね、噛んでくゝめてあげようね。

源二 (出でうかゞひくすれ絡ふ) さあ、それ、足を、足を。な、へ、へ、へ、蝶ちゃん、お前はだして、真綿に白魚といふ鹽梅ぢやあ、枯草だつて針の山だぜ。打たれた駒下駄でおともをする、此の心中だてを見てくれよ。池を前にしていふんぢやあねえが、溺れたもんだぜ、我ながら、かうまで惚れたも因果なら、惚れられたも因果ぢやねえか。満更にくくもあるめえが、えへへへ、どうだい、まあ此の手觸りは……(駒下駄をはかせた手にて、裾、膝、腰、胸、帯、やがて、懐に手の觸れんとする時、その時まで、氣づかれの果、たゞふら〜としてするがまゝなりたるが、屹となり、忽ち簪にて矢庭に源二の鼻を刺す。)

源二 きやツ、ひいッ人殺し! わあ畜生、阿魔、血迷つたな、狂つてるな、え、危い、もう些とで目が潰れらあ。

蝶 私、懐を見ようつて、そんな目は潰してやる。い、人の紋の、梶の葉の平打だもの、見えないだらう、まぶしくつて。

源二 や、吐かしやがつたな、うぬどうするか見やあがれ。
弱々と身を揉みつゝ、

蝶 松源の人、松源の人。

源二 この寮はとうに空屋だ。青書生に目がくらんで、それだから、洒落れた兄さんの心意氣が分らねえ、いま目覺しのまじなひをするから見ろ。

捻つて搦み、女を井げたの前へ引倒す。

蝶 あゝ、あれえ。(弱々と。)

源二 (片足にて真横に土足にて、帯わきをふみつけながら) 些と古句だ、宗匠の點はかゝるまいが、かはいさ餘つて何とかだ、え、と、朝顔につるべとられた憎さかな、か。こいつも點にやなるめえが、そののぼせさげの薬と一所に、水責にかけるから、然う思へ。

つるべを酌む。

蝶 あゝ。(たゞなよくと力なく溜息つくるのみ) 赤ちゃんには、浴せないでね。

源二 べらぼうめ、草花にかけりや嬉しがるばかりだ。苦しめて責めて遣るんだ。が、だが、だがよう、釣瓶を傍へ押つけても、此の顔を見ちやあ、あ、了つた、そつぼうへ打まけた、どうだ此の期に及んだら、いふことをすなほに肯いて、いゝ處へ一所に行かうと思はないか、抱いて行くぜ、おぶつて行くぜ、な、な、うむ、何だ、びんの毛をふりやがる。堪らねえ。惜いもんだが、砂利も砂も、目口へ、鼻へ、眉毛へ、耳へぶちまけろ。

二度目のつるべ、忽ち傾かむとす。

頭 (づかりと出で、腕を扼る。)

源二 や、うぬ。

頭 源二だな。おいらあ、池で鯰を釣つて、獺の出合にしちやあ、あひての容子が、あんまりよくつて、變だと思つた。蝶吉さんを手籠にしやがる、此のぼうふら鯨、蚯蚓の鯨。ふん、薄化粧をしてやがる。蛆の湧いたこのしろ鯨め。

源二 黙つてろ、此のどろぼう。誰にことわつて釣をするんだ、密獵だぞ。交番へいつけるぞ。

頭 然ういふ見だ、然ういふうまれつきだ、てまへは、町内で、訴人、密告に出来て居やがる、縁の下、天井ならまだしも總後架へしやがんで、たちぎきをする奴だ。松源さんとおいらとの

中を知つてるか、池をかいぼりしようとな、なんだ。

源二 勝手にしやがれ。

頭 うむ、勝手にする。

源二 放せ、痛い。

頭 蝶吉さん、これを見ねえ、いゝ氣味だらう。

源二 (死もの狂ひに、振放し立向ふ) 駒下駄のうらみもあるんだ、覺えてるか。

頭 忘れねえや。然うだらう、この下足野郎、草鞋にして、踏んでやる。

上月 (いきせいて、走り寄る。)

頭 おゝ、歌枕で見知りの若旦那、蝶吉さんの殿さまだね。いゝ處だ。倒れて居るのは、蝶ちやんだ、蝶吉さんだ。

上月 おゝ。

頭 何しろ、唯事でねえやうだ、介抱なすつて、しつかりだよ。や、青痰を引かけやがつた。何だ、間違へた。間違へても何でも、先づ一旦、はゝゝ、草鞋にして踏まないぢや江戸の町は通れねえんだ。遁げるな、待て。殿さん、屹と蝶吉さんを預けましたぜ。

上月 確に。

頭 (驅出す源二をさつと追ふ。)

上月 お蝶、お蝶。

蝶 (抱起されて、うつとりイむ。)

上月 お蝶、上月だ。しつかりおし、お峰、峰ちゃん、松山峰子。

蝶 あゝ、上月さん、よく来て下さいました。私は来て下さると思つて居た。……もうみんな勘辨して下さい、かんにんしてね。

上月 (涙ながら) かんにんするもしないもない、私があやまる。

蝶 うれしい、うれしい。おや、さあ、赤ちゃんを見て頂戴、かはい、でせう。

上月 あゝ、かはい、とも。

蝶 抱いて、ね、抱いて。

上月 (抱取る) うむ、襦袢の袖か、——引切るまで。なりも、心も、そんなに、そんなに、亂れるまで。しつかり抱いたよ。

蝶 私も。抱いて。

上月 勿論。

蝶 もう私を棄てないで。

上月 棄てるものか、棄てられたくない。

蝶 容子のいゝことばつかり、その容子にも迷はされた。もう離れない、離さない。でも、また離れるといけないから、誰も見ない、人の居ない、土も水も眞暗でも、おつけはれた處へ一所にゆきませう。一所ぢや、いや？

上月 むゝ、行くとも。

蝶 おつかさんも待つて居ます。あれ彼處に、(池の中) 嬉しさに、おつかさん、峰が見立てた、かはい、だいじな、お婿さん。

上月 恥入るよ、申譯がないよ。お前、おつかさんの前へ行くのに、こんなぢや、(袖をさすり、襟を撫で、その姿をつくるふ。此の時ぬけ落ちる平打を見つて拾つて渡す。蝶吉うれしさにさし直す。)

蝶 あなたも羽織の紐が解けて居る、(結ぶ) 好いたらしい梶の葉の。……(前髪をひたとあて手を取合ふ。)

上月 さあ、出来た、天でも、地でも、水でも、火でもお前の許へ婿入りだ。

蝶 三々九度ね、あゝ、一口、お酒が上げたいけれど。

上月 その言葉が甘露だよ。三々九度も何もあるものか。上月が一生に一度、大盃で水の谷の池

ごとのむぞ。

蝶 此の水が冷たかつたら私の肌であたゝめます。浮いた蓮葉なんぞより、私の乳が柔い、つり橋のやうなものより、私の手足を、橋にして、三途の河で剥がれる時、あなたのきものを脱がせるかはりに、私は皮まで剥いでやるから、上月さん。

上月 水へ沈むやうな氣持でない、お峰、お前の袖へ入るやうだ。

お悦 (走り出で、汀に、蘆、秋草手づるに迎る時、樹立蔭深く顯はるゝ、提灯、算占の姿を夢みる如く、うつとりと、やがて目さめるばかり、きつぱり見る) あゝ、算占の、ごしんさん、女、十九歳、蝶吉と申します。男、上月、二十五歳……運勢を、見て下さいまし。

數木 すぐ、そのお聲が、天を射るやうに、此の胸を貫きます。

お悦 えゝ。

數木 しんもつて、お可哀相でございますが、おあきらめなさらなければなりません。お二人とも、もう此の世においでなさいませんよ。

お悦 えゝ。

數木 實は谷中の暗い樹蔭で、此の今夜、色もあをざめた、品のいゝ若い方が女の行方をうらなへと申されました。算勘までもありません。お尋ねなさる其の男より、尋ねられる女の方が、すぐ私の目に映つたのです。一昨年の夏の末に、丁ど此處で、身の上をうらなつた、あだな、うつくしい藝妓です。その人には危難があります、お急ぎなさい、だまされると思つても、入谷、水の谷の池の方へと云ひますとね、いとしい事には、歴とした御人體が、こんな婦のいふことを、すなほにきいて慌しく驅出しておいでになります。私もうしろ髪を曳かれるやうに、こゝへばかり氣をとられて、わくゝと心いそぎに、あわてて雇つた俵の上で、何と、提灯をつけたまゝ、算盤を數へ、數へ、一進、一進がひつたり合ふと、此のうらへ参りました。お可哀相とも申しやうがありません。ご最期もこの水です、もう沈んでおいでですよ。

お悦 奈落へですか、あの此の水へ。(此の時或は二人の駒下駄を見る事あらむ) 私はまた、谷中から綱曳で、もとの主人の吉原の近野へかけつけて、そこに居ないもんですから、いつもおつかさんの處へ行くのに、寮の庭から、此のちか道を抜けて、あの妓はおてんばで通りました、もしやと思つて来たんですが、何うしませう、何うしませう、いまのうらなひを伺ふ中から、もう其の提灯が墓原へ白くなつて、冥途に迷ふ二人の影を。

數木 いゝえ、こんなものは目障りでございます。(柳の枝に、馬乗の柄を高くかける) 灯のない

方が、あなたにも、よく見えます、お二人は迷つたまうじやなんぞではありません、高く輝く
天人です、大空をこらんなさい、紫と、緑と、きら／＼と星が二つ。

お悦 あゝ、きれいな、池にも映つて、影が光る。波に面影が浮いて見えます、男は髪に星の紫、
梶の葉の羽織の紋が幻に。女の緑は簪ですか、半襟の色。あれ、雪のやうな顔が其のまゝ。
でもかはいさうに、島田の鬢のおくれ毛が、亂れて浮いて見えますよ。なむ、お蝶さん、上月
さん。

數木 柳が散りますね、月の桂の降るやうに、あをい星から黒髪がこぼれますね。

とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、とん、
太鼓の音近く冴え、幕ののち、尙太鼓の音響く。——)

日本橋

三幕目 一石橋の雪の一部

千枝子 お父さん。(すがりつく、傳吾吃驚す。)

葛木 (目ざとく父娘の情態を洞視す) 確と、見たまへ、人生自然の處する處を、(足とく颯爽と
行く。)

傳吾 待たう、先生。(千枝子のお父さんと呼び／＼絡ふを拂ひ、縫るをつきのけ) 待ちをれい、
葛木。

千枝子 (激しく) お父さん——

傳吾 うむ、千枝子……ど何處に居た。

千枝子 お父さん、お父さんが些ともお内に居ないもんだから、水道のおひやも出ないし、電氣
もつかないの、おさつだの、うどんのお残りだの、時々よそのをばさんたち下さるんだけれど、

ひもじいわ、あの、私よりもつとお腹のすいた鼠が澤山出て、私を噛らうとするでせう、五晩も六晩もよ、私こはくつて仕様がなから、眞暗な中をお父さんを探して歩行いて、今夜は、御縁日の時覺えた、お地藏様のとこにかんで居たらばね、お地藏様がね、——あつちを見やの——とおつしやつたから驅出して來たら、お父さんが居たんだわ。

傳吾 地藏様が、何、(荒涼たる雪景色を見る) 白一面だが眞黒な夢のやうだ、こいつはまるで賽の河原だ。

千枝子 可恐い、抱っこして、お父さん、一所にお内へ、よう、可恐い、賽の河原。

傳吾 だからよ、だからよ、いま其處へ鬼が行つた、(葛木のあとを睨む) あの鬼を片づけねえぢやあ地獄の道は突切れねえんだ。

千枝子 お父さん。

傳吾 とても地獄だ、はなせ。え、おれも追つけ、賽の河原で一所にならない！(突飛ばして雪に消える。)

千枝子 お父さん。(伏まろびたるが辛うじて起上る、雪また盛にふる、千枝子、袖にて拂ひつゝ、ふるへつゝ、帯にさしたる裂破れし舞扇を開きて、髪に挿し、薄汚れたる手拭にて頬冠りに結びながら立竝み) お父さん——(聲も噎れて掻いすくむ。)

清葉 (コート姿、深き襟巻、蛇目傘にて、御堂に詣でむとしたるが、これを透しみて急いで寄る) 何うしたの、娘ちゃん、何處へ行くんです、お内は？……

千枝子 賽の河原。

清葉 え、……賽の河原、おかあさんは。

千枝子 とうになくなつたの。

清葉 まあ、可哀相ね、お父さんは。

千枝子 お父さんはね、私を突飛ばして去つたつたの、鬼を殺すんだつて、嘘よ、私を打棄つたの。

清葉 あれ、いふことも取留めない、寒いでせう。おなかかすいて居るんでせう。

千枝子 歩行けないの。今朝から何にも食べません。

清葉 どうしたらいいだらう。可哀相に、(手を取り扶起して熟と視る) 可愛らしい顔をして。まあ、舞扇を、牡丹の花笠のやうだけれど、雪がかつて、お雛様の有平糖のやうになつて、これでは凍えて了ふわね。しつかりおしよ、をばさんがついて居るからね。

千枝子 をばさんぢやあないわ。お姉ちゃん、藝妓だね。

清葉 (おもいれあつて水を望む) 優しい方のお志で、去年の榮螺も蛤も、綺麗な石に代つた

でせう。小石、小石を積むやうな、私は果敢い藝妓だけれど、彼處にお地藏様が居らつしやるから、安心をおしなさい、娘ちゃんは踊が好きなのかい。

千枝子 せんに藤間のお師匠さんへ上つたのよ、もう誰もかまつてくれない。お姉ちゃん教へてね。

清葉 立派なお師匠さんを頼んであげます。もう私が、弱いからだでも生きてるうちはひもじい思ひも寒い思ひもさせません。都合をして一生引取つても構はない、藝妓家だからといつて、家業なんぞさせません。踊のお師匠さんにしてあげようね。

千枝子 ほんたう、ほんたう、あゝ、嬉しい、いまのさつき、それだと、あのお地藏様が——あつちを見やの、あつちを見やの——とおつしやつたのは、お父ちゃんぢやないお姉ちゃんの事だつたわよ。

清葉 あなたにおつげ、地藏様が……まあ。何しろ早く暖い處へ行つて、それから悉くきませうね。それにしても歩行けるか知ら。

甘酒屋 甘い、甘い。

清葉 あゝ、いゝ處へ、甘酒屋さん。

甘酒屋 おや、こりや、瀧の家の姉さんで居らつしやいますね。今頃、何うなすつたんでござい

ます。大雪のこんな處で。

清葉 いゝえ、そんな事より、早く甘酒を、このお子に。

甘酒屋 へい、お誂へ、お燗鹽梅よし。

手早く酌んで渡すを、千枝子、手に取るよりかぶりつきさうにする。

清葉 あゝ、お待ち、口をやけどするといけません。(優しく頬にあて、加減をみて千枝子に授く、一口においしくのむ。)

甘酒屋 姉さん、あひかはらず、人助けをなさいますね。

清葉 たかく、これから蕎麥でさあね。——雪だから、きものはそんなに濡れては居ないね、着かへるにも何にも、とに角さあ、急いで。——歩行けるか知ら。

千枝子 大丈夫よ、少しくらゐる踊れるわ。

清葉 あれ、跣足で居るのね。

甘酒屋 や、滅相な、あなた、あなたが、お端折りで足袋跣足になつて堪るもんですか、白い細いおみあしが氷柱になつて折れ了ふ。横町の角の蕎麥屋でがせう。一走りだ、おぶつて飛びます。

清葉 御恩に被ますよ、お禮をします。

甘酒屋 お禮なんて飛んでもない。こんな晩に子供をおぶつて蕎麥屋へ行くのが、私あ若い時からの道楽で。

清葉 ほ、嬉しうこと、待つて頂戴、このお道具は？

甘酒屋 其處に立つて番をしておいでなせえ。

清葉 ……………

甘酒屋 さうすると、忽ち雪女郎といふ化ものに成りますから、見るものを殺します。(遽然として笑ふ) はッはッはッ。串戯ぢやあねえ。本所の津輕原ぢや當今でも、狐が化けて鍋焼をくふつていひますがね、この河童は甘酒にかゝりやしません。すたく打つちやつておいでなさいまし。

清葉 お言葉に甘えませう。さ、私にお預け、娘ちゃん。(と舞扇子と手拭を取つて巻いて帯へさし、見事な肩掛を、千枝子の頭からすつぽり被せる。)

甘酒屋 わあ、い、香だ、此の駄賃千兩だ。甘い、甘い。

清葉 びつくりするわね。だしぬけに。

甘酒屋 つい口癖になりましたね、甘い、甘い。

その入り行くを見送り状に清葉の足を運ぶと行合ひに警官出づ。

清葉 (道を譲つて) お寒うございます。

笠原 一人ですか、かゝる雪に。あ、誰か人を待つてすかね。

清葉 そんな意氣なんではございせん。誰もいたしませんことですが、母が病氣だもんですから、お地藏様へ日參をいたして居ります。晝間おまゐりをしますのが、今晚はよぎなく時刻もおくれまして……

笠原 (一揖す) 御奇特です。(清葉の姿見えすなる時、恰も甘酒屋の荷の前に立ち、あたりを覗し、釜を覗き行燈をふツと消す。)

不用心ぢや、馬鹿な奴が。

— 幕 —

五幕目 檜物町の場の幕あき

千枝子 (派手なるいうせん、無心に口三味線にて、たゝみたるまゝ、舞扇を使ひながら飴屋の横に來かゝる。)

仁作 いやう、(錫杖をならしながら) 豆お師匠さん、うまいぞ。

千枝子 (さつとはにかみ) いやな、ぢい。(扇にて打たんとして) あら、地藏飴屋さんだし(恭謙なる状にて身をひき) ごめんなさい、私はお地藏様のところで拾はれて助かつたんだわ。(袖に扇子を添ふ、こゝに舞ぶりあるべし、かくて飴屋を拜み、すぐに行く。)

仁作 (そのうしろ姿に手を合はす) あゝ、菩薩功德廣大。(と地藏經を押したく。)
——旅僧の装にて葛木登場。——

白鷺

第二幕

師走のある早曉——

あひゞき橋界限、霜強し。

小篠、髪を結びにゆく心にて、下手より出づ。同時に上手より、小篠の妹お絹出づ。

お絹 姉ちゃん。

小篠 あゝお絹ちゃん何處へ?

お絹 姉ちゃんは今歸るの。

小篠 私、これから髪結さんにゆくの。

お絹 まあ、こんなに寒いのに早く。……

小篠 忙しい髪結さんの、番がとつてないんだから。早くゆかなくちや。……

きぬきか

お絹 あら、番なんかいつだつてとれるぢやないの。

小篠 それは、とれない事もないけれど、普段からそれ丈の事をして置かなくぢやね。

お絹 あの髪結さんは、家で世話してあげたんだもの、それ位の我儘は。……

小篠 だから尙、こちらで遠慮しなくぢや。……(ト居所かはる。)

お絹 姉ちゃん、姉ちゃんの襟は本當に白いねえ。

小篠 お白粉が濃いからね。

お絹 お白粉が濃いならい、けれど 霜ぢやないかしら。(ト襟をのぞく。)

小篠 いやだねえ。(ト袖をかきあはす。)

お絹 あつちから見た時は、姉ちゃんだと思つたけど、家元さんのおさらひで、いつか鷺娘を踊

つたときの、白鷺の精酷似でこはい様だつたわ。

小篠 鷺がこはい様なこんな早く、絹ちゃんは、またどうしたの。

お絹 私は、先の家の近所にあつた浪除様へ朝詣りをしてるの。姉ちゃんの丈夫なやうに、又、

商賣の繁昌するやうに。……

小篠 まあ濟まない。が、私の事よりお母さんの事をお願ひしておくんなさいよ。

お絹 でも、お母さんが姉ちゃんの體の事を、お願ひ申せと言つてるんだもの。姉ちゃんは家の

事で大層苦勞をしてる人だから。

小篠 着物の相談までする程家の役にたゝないのに。……きまりがわるい。……

お絹 姉ちゃんその着物が出來たの。だからお詣りして縁喜よく姉ちゃんに届ける様に、こゝに

持つて來てるの。

小篠 あゝさう、一寸こちらへ來ておくれ。(ト普請小屋にみちびく)こんな所だけれども早く紋

だけみたいから。

お絹 (風呂敷つつみを半ほどく。)

小篠 (紋をのぞいて) あゝよく出來た。竹に雀、霜がこゝへも下りやしないか。なんだか雀が

白い様だねえ。下のこの美しい赤いのは?……

お絹 綿の入つた肌着です、野暮でも何でも、姉ちゃんに是非お母さんが着て下さいつて。

小篠 さうして絹ちゃんが縫つたのかえ。

お絹 え、今しがたまで夜通しで。

小篠 雀もぼうつと暖かくなつて來た。ありがたうよ。(ト言つてお絹の手をしかととる)冷たい

手だねえ。(ト、手の甲に息をかけてやる。)

お絹 姉ちゃん、お詣りに一緒にゆかない?

小篠 (ちよつとためらひ) あのね、それはねえ——お鳥居へは一寸遠慮をしなくちやならないから、お前ひとりで行つておくれ。

お絹 あい。(ト、これにて風呂敷づつみを肩へ斜めに野暮に背負ふ。)

小篠 何だね、お前、そんな巡禮や道者のやうな恰好をして……みつともないぢやないか。

お絹 いゝえ、久しぶりで、姉ちゃんの息であつたためてもらつて嬉しかったから、このあつたかさを冷さないやうに、すぐ行つて掌を合せたいんです。(ト、袖に手をつむ。)

小篠 (思ひ入れ) 罰が當つても一緒に行かうか。

お絹 あら、そんなこと。

小篠 ぢや、行つておいで。魂は一緒だよ。

お絹 お晝前には會へるわね。

小篠 氣をつけておいで。潮は一杯だよ。(二人別れる。)

暗転。

明るくなると朝日があたつてゐる。普請場の中に孝がゐる、焚火をしてゐる。待合よりさらつて来た残りの銚子をあたゝめてゐる。

蟹賣の聲。

孝 蟹や大蟹と来たな。あいつを一パイこゝでやいたらどんなもんだらう。雛子の畜生、やくも

んかい。江戸つ子がわざとおこつてゐる處だ。

順一 外套を着て来がゝる。

孝 やあ、兄さん、どうしたんだい。

順一 寒い、寒い。孝、お前は どうしたんだい!

孝 まあ、こつちへおいで。昨夜はよつびて待呆けを喰はせやがつてさ、今來やがつた、べら棒つてんで、銚子をひつさらつて飛び出して来たんだ。兄さん、兄さんの方はおつそろしくい、首尾だつたらしいのに、どうしたんだい。

順一 いや、勢のいゝお前の前で言ふのは一寸憚りだけど、その、今朝暗いうちに……あゝ、つとめは辛いなあ、髪を結ふといつて出かけたんだ。あの眞白な襟に霜の針がさゝるやうだつた、俺はつくづく、ふところの寒いのが一層氷になるやうで、可哀さうで身ふるひした。

孝 愚痴かい、惚氣かい、眞白な襟もないもんだ。さういふ襟へ酒を一杯ぶつかけてやらうか、あはゝゝゝ、まあそれより、徳利から一杯おあがり。

順一 (徳利よりラツパのみをする。)

孝 で、それでどうしたんだ!

順一 かへるまで是非まつてろつてんで、うで組みをしたり、うつむいてみたりしてゐたんだが、知つてる通りあすこの家へ金のまはりがるいだらう、亭主の奴め、自分でがらく雨戸をあける、一杯に日のあたる物干を障子一重で盆栽に水をまかれたんぢや居た、まれないから出て来たんだ。あ、お互に落武者だが、兄弟がかう揃つて、夜討ちぢやない朝がけに——ひつかへして、貧乏曾我で討入らうか。

孝 蝶と千鳥でなくつても、せめて蜜柑か橙でも、丸での文なしぢや齒が立たないよ、よし、俺が何とか算段する、ところで兄さんは篠ちゃんに約束がある、これからもう一度ひきかへすんだらう。

順一 面目ないがそのつもりだ。

孝 ぢや、おれがこれから算段に出かけるが寒くてしやうがない、その外套を貸さないか。

順一 どうした、打殺したか。

孝 冗談ぢやねえ、いくら勘當の身の上でもそこまでは下らねえ。奴が止めるのをつきとばす拍子に忘れて来たんだ。

順一 (外套をぬぐ) さ、着ておいで。

孝 おや、(どんと背中を殴つて) おいなんだい、兄貴のその恰好は！ 兄貴らしくもない、精根

をつけないか、何しろ氣つけは早いに限る、ぢやあ、わたしは出かけるよ。(ト、いそぎ足で去る。)

順一 はあとに残る、やがて普請小屋より出る。ト橋の上から来る小篠の姿を見つけ、わが姿を恥づる心にて、少しあわてて小屋のかけにかくれる。

小篠 出づ、あとに與吉従ふ。

與吉 お篠さんく。

小篠 (ふりかへつて) まあ、與吉さん。

與吉 昨日は難有うございました。お蔭で助かりました。あんな無理の願へた義理ぢやないんですけれど……難有うございました。(おどくして云ふ。)

小篠 ……………

與吉 實は、早急でございますけれど、その……(云ひそびれる。)

小篠 ……………

與吉 お言葉に甘えてその……實は證文をもつて参つたんですけど。……(證文を出しかける。)

小篠 ……………

與吉 朝つばらから申譯ないんでございませうが、今竹家さんへ伺ひましたら多分髮結さんだらう

といふ事だ。……で、實は今、髮結さんへ伺はうと思つたところで……あの御判をいたゞきた
いと……

小篠 捺して差上げると言つたら捺して差上げます。

與吉 (ペコ／＼頭をさげる) 相済みません、本當に……こんどといふこんどは……わたくしも
たとへ肩に天秤をたてても一生懸命に稼ぎます。

小篠 (冷かに) 誰の困るのも同じことですから。……ですが出先でこゝには判をもつてゐませ
んけど。

與吉 向うぢやお篠さんが連帯にさへなつて下さるならといふので……だから拇印でも何でも結
構なので、實は今日おひるまでに先方へ行く事になつてをりますので。……

小篠 え、よござんす。さあ、一寸見せて下さいませ、その證文といふのを。……
與吉證文をわたす。

通行人(納豆や)あり。

兩人左右に別れ、小篠は證文を受取り橋の欄干にて、手早く口紅にて拇印を捺す。

小篠 これでよござんすか。

與吉 (押しいたゞく) ありがたうございます。この御恩は死んでも忘れません。勝手にござい

ますが、昨日もお願ひ申した通り、叔父さんや叔母さんにはこの事は内證に。……

小篠 え、そのかはり與吉さん。……

與吉 (小篠を見る。)

小篠 これつきりの御縁と思つて下さいませよ。

與吉 (あわてて) おしのさん。

小篠 もう何にも云はないで下さい。

與吉 (取りつくしまもなく) いづれ……いづれまたお禮に出ます。お目にかゝります。……(ト
悄然と去る。)

順一 出づ。

順一 おい、おしの。

小篠 まあ。

順一 あの人は?

小篠 何か話した、私の昔のいひなづけです。

順一 あの、いとこ同志の?

小篠 嫌つて嫌つて嫌ひぬいた……それほど厭なものならと借りてゐた二千圓のお金を返してお

父さんが破談にしてくれた人です。——そのお金がもとで、わたしは藝妓になつたんです。

順一 ぢや、お前にとつては。……

小篠 敵のやうな憎い人でも、あゝまでしがな身分の上になつては。……あれでも昔は芳町柳橋で、すこしは顔をうつた人です。……あゝいやだ。……私だつたら生きぢやるない。

順一 お篠。……

小篠 あい。……(ト、につこり笑つて)うそよ！ あなたといふ人のある大切なからだ、めつたに死にやしませんわ。

ト、兩人じつとなる。 通行人二三人(大工)來かゝる。

—幕—

第三幕

南鍋町風月堂の二階。——食堂。

真中のテエブルに人待ち顔の順一一人あり。

間。

お絹年坊をつれて後より出づ。

順一の後より目かくしをする。

順一 誰だい、女の手だね、小篠さんかい。

お絹 (年坊に囁く。)

年坊 誰？

順一 誰？

お絹 この町内。

順一 鍋町。

お絹 似たもの。……(ト、手を放す。)

順一 お絹ちゃんか。年坊といふのはこの子か、どうして来た？

お絹 こちらへ仕立物を持つて来ましたら、先生が見えましたから、来たんですよ。先生は？

順一 一寸、用事で。

お絹 何の御用？ あててみませうか。

順一 あててごらん。

きぬきか

お絹 一寸立つて(ト、順一を立たせる)あの時計をこらんない。

順一 (時計を見て)見た。(ト、ぼんやり云ふ。)

お絹 姉ちゃんを待つてるんでせう……(間)ねえ、姉ちゃんが病気で暫く家へ歸つてゐる時、

お座敷ではお會ひになれないもんだから、手紙で約束をして會ひにお出でになつたでせう？

銀座の角の服部の大時計を見て、じつと立つて時間を見て待つてゐるたでせう？ 一寸でも時間

が遅れると姉ちゃんが氣を蒙んで、もう一寸待つてと言つて、私がお使ひをしたんですもの。

順一 冷汗だ。冷汗ついでに、今こゝでお禮をしたいが、半襟かかんざしか、姉さんと相談しよ

う。さ、これは年ちゃんに。(ト、なにがしか紙につゝむ。)

年坊 お兄ちゃん。(ト、禮を云ふ仕種。)

お絹 なんですね、先生といふものよ。

順一 また汗だ。

年坊 あの、だつて、お兄ちゃんがいゝものを呉れるから一緒にお出でと言つたぢやないの。

お絹 なんです、あんなことを……いえね、この子、人みしりをして、はにかみやで、さう言は

ないと一緒に來ないんですもの。

順一 汗でもいゝ。よく來てくれたね。(ト、情合あり。)

五坂夫人 寅子ぬつと入つて來る。ぢろく年坊の方を見る。

年坊 姉ちゃん、歸らうよ。歸らうよ。

お絹 これですもの。さ、行きませう。

年坊 兄ちゃんも一緒に……

順一 後ほど〜。

お絹、年坊去る。

このうち、ボオイ、五坂夫人の傍による。

ボオイ おあつらへは？

五坂夫人 ……………(あとでと云ふこなし。)

ボオイ はつ。(ト、去る。)

五坂夫人 (やがて食籠を取りあげて讀みはじめ)アラジュリアンヌ、アンドウエル、アスベ

ルジュ、ピフテク、エスカロプ、フロマージュ、フルキ、ガトー、えゝ、ガトー……

順一 (獨りで酒を飲みつゝ、振り返つて見て不愉快な表情。)

(間。)

五坂夫人 (つと立つて食籠を持ち、ゆつくりと順一の傍へ寄る。)

順一 (振返る。)

五坂夫人 (食箋を指さしつゝ) これ、何て讀むんですか。
すると順一じろりとその顔を見る。

順一 おかみさん!

五坂夫人 ……………

順一 おい、人違ひぢやないのかね。

五坂夫人 うゝ。

順一 誰かの葬儀でも出遇つたか、僕の方ぢや知らない婦人だ。

五坂夫人 (むつとして) え、私だつて知らんのです。——私、……知らない人ぢや、ものを

聞いては悪いのですか。

順一 女がね、おい、まるで他人に、だしぬけに物を聞いていゝのは、迷子を探す路と、舅姑に

飲ませる薬の名だ。

五坂夫人 失敬です、失敬な! あなたは。……私には主人がありますよ。

順一 當り前よ、主人があるのは人相に顯れてら。その主人に氣の毒だから餘計な世話だが言つ

てやるのよ。お前は退屈しのぎに若い者と遊ぶ氣だらう。難有がらせて、嬉しがらせて、天窓

から眺る氣なんだ。……又その氣でなくても、無暗に男に口を利いて何うするえ。……然も僕

は酔つてるぜ、酒の上だ。……奥さん、もう一つ、と杯を出したら何うする。……手前の方が

持ちかけた附合だ、斷り切れまい。それとも失禮だとか失敬だとか言つて腹を立てるかね。酌

いでくれろと怒鳴つたつて交番へは駈出せまい。自分の方に落度があるから、平あやまりにあ

やまるか、それとも酒の相手をするか、抜き差しは出来なからう。

五坂夫人 ……………

順一 かう見たところが、相當の御身分らしい。歴平とした亭主持が、氏素性も分らない、僕な

んぞに、阿魔の、媽のと言はれるのも、總體なめ過ぎた心得違ひから起るんだ。……手前たち

ばかりの東京だと思つてると、些と料簡が狭からう。いゝから、もう彼方へ行きねえ、恐れて

酌をさせないんぢやねえ、その手ぢや酒がまづいからよ。

手酌でつぐ。

五坂夫人 失禮な……なんて失禮な。

キツとなつて他へ去る。

順一 はゝはゝゝ。

思はず高らかに笑ふ時、ポオイが、二本目の酒を持つて來て置いて去る。

小篠が急ぎ足に現れる。

小篠 濟みません、遅くなつて。まあ何もあがらない？

順一 飲んだばかり。

小篠 あら、いゝ色よ。可愛いこと。

順一 はゝ、可愛いと言へば、今までこゝに絹ちゃんとし坊がるたんだ。

小篠 あら、どうして。

順一 私のかげをみて、こゝへ上つて來たんだ。なるほどとし坊は、お前が目の中へ入れたいほど可愛いがるわけだ。

小篠 さうでせう。いつか一度、會つていたゞかうと思つてゐたんですよ。そりや丁度よかつた。

……

順一 絹ちゃんに何か買はうと約束した、年坊にも何か買つてあげよう。

小篠 あら大變ねえ。

順一 年坊は何が好きだ。

小篠 年坊の好きなものはね。さくらんぼ。

順一 さくらんぼ、それは又。

小篠 いゝえ、こなひだも水菓子やの店先で見かけて、これを買つてとねだつたのを毒だと言つていただきました、蛇いちごでもないものを……

ボオイ來る。

小篠 此處に日本の字で蝶と書いてあるところは、フライか何かでせう。それに、鶏といふところを二品ばかり、……それからスープ、……

順一 勘定は私がする。

ボオイ ヘッへゝ。……(笑ひつゝ去る。)

兩人飲む。

順一 時にお父さんの病氣はどうだ？

小篠 相變らず。

順一 商賣の方は？

小篠 駄目よ、いゝ筈はないわ。

順一 この腕一杯仕事をして、お前を自由な身體にしたいが。……こつちから客を求めて、我が繪を賣るといふ奴は、稻木順一、到つて不得手でね。

小篠 わかります。……もうそのお言葉だけで、私は、うれしい。……

順一 賣らん哉買手は皆横柄そのものだ……あゝ。

この時、五坂熊次郎と、前頭二枚目あたりの相撲烏山が語りつゝ入つて来る。

五坂 (小篠に氣付いて) おゝ、お前は小篠ぢやないか、……(と、二三歩……)

小篠 (思はず、順一にすぎる) あなた。……

順一 (キツとなつて) あゝ、五坂さん、こりやア私の家内です。……

五坂 何?

順一 小篠、御挨拶を。……

小篠 はじめまして、何ぞ御用?

五坂 小篠それですむか、ばいため!

と、つかみかゝらんとする。

小篠 あれ。

と、順一に縋る時、五坂夫人寅子現る。

五坂夫人 まあ、旦那様。

五坂 お、お前、何處に居つた?

五坂夫人 私、さつきからこゝに待つてゐたんですけど。……あなた、私、口惜しい。この人、

私を侮辱しました。だから私、居たゝまれずに。……

五坂 こいつが……お前に侮辱を。……怪しからん。……ようし制裁を加へてやる。……烏山、

その二才を引抓んで二階から放り出せ。えゝ、何をぐづぐづしてゐる。俺が萬事心得てるんぢや、さア抓んで、やつつけえ!

烏山 (いきなり順一の胸倉をとる) おい!

順一 何をするか。……(と、テエブルのナイフを取つて逆手に切拂ふ。)

小篠 あれ、

烏山 野郎。(と、ナイフを落させて) えいッ!(と、突く。)

小篠 (烏山に) 何をするんです。わたしの大切な先生、宿のお前さん。……

烏山 なんぢや。

小篠 なにかまだ足りない、兄さんの、おつこちの、情人のいゝ人に、石炭がらをかきまはすシヤベルのやうな手を出したね。今のは張手と言ふのかい、押手と言ふのかい。

烏山 やゝ、ほざくな、女郎が何を知つて。……

小篠 知らないけれど、四十八手とかある中に、盲づかみといふのはなからう、目をあいて東京の町をお歩き、わたしは辰巳屋の娘だよ。

烏山 (のぞかうとする。)

小篠 (片袖で顔をかくして) むつとする、いきれ臭いいやな男の臭ひがする。(五坂にあてつけの心) 黙つてお聞き、お前さん、その時分濱町のわたしの家の内證をのぞいて、旦那様、御新造さん、お嬢さん……今日は、今日は、今日はと申さいでは明日のまはしが捌けません……今日はと申します。出入をするたびに、あ、は、は、私の針箱の中からだつて、光つた星をもらつたらう。幕へ入つたのは誰のおかげだ、關取、義理人情を忘れては、劍ヶ峰でこらへても、土俵がないからさうお思ひ。辰巳屋の娘だよ、篠だよ、お篠だよ。(ト、袖をとる。)

烏山 わあッ！ がらり様子が變り過ぎたで、どえらい見ちがひをしました、とんだ事ぢや。

小篠 おふざけでないよ。

烏山 今のはあれは冗談事でがんすでえ。

小篠 冗談にも程があります。

烏山 え、巡業やら何やらと御無沙汰をしてをりますで嬢様、その後は御機嫌好えか。

小篠 御機嫌は悪いわ。

烏山 えつへ、つへ、

小篠 (キツと五坂を睨んで) 五坂さん、あなた、こんな綺麗な奥さんを持つてるながら……あ

んまり變なことをなさらないで下さいよ。

五坂 うつ、(ト、當惑の色。)

小篠 お互様に、夫婦は仲好くしませうね。

五坂 うぬ、

順一 (順一を願り見る。)

順一 (手より血が流れてる。)

小篠 (順一の手を見て) あれ血が……(介抱して) 痛むの。

順一 いや、……

小篠 こんな處にはるられない、さ、貴方歸りませう。ポオイさん、御勘定は竹家の小篠につけておいて下さい。

ポオイ はい。

小篠 旦那様がお立ちだよ。關取、送つておいで。

烏山 ねえ。

小篠 いやなのかい？

烏山 え、參りますで。

小篠 さ、ゆきませう。

と、縫すがる。

五坂 え、のか、それで。

小篠 左様なら。

五坂等口借しき思入おもひいれ……

—幕—

第四幕 (待合於登利)

雛子 出て来る。

雛 今晚は、澤ちやんどちら。

澤 下の六疊です。

雛 ありがたう。(と入る。)

六疊をあけて、

いらつしやい、待つて？

孝 待つた？ おい鼠にひかれねえのがみつけものだ。

雛 だから早速かけつけて来たのよ、あ、苦しい。

孝 ふん十七八歳の生娘ぢやあるめえし、變に氣取るねえ、早くこつちへ入つてそこを閉めねえ

か、さし合があるんだよ。

雛 さし合？

孝 來てるんだよ、二階に。

雛 あ、兄さん？

孝 野暮な聲出すない！

雛 はい、(と、障子をしめる。)

二階から小篠下りて來て、

小篠 お澤さん、一寸澤ちやん。

澤 はい、唯今。

小篠 さくらんぼ、まだ？

澤 え、今すぐ、濟みません、遅くなつて。

きぬきか

この時玄關より女將おとりが入つて来る。

小篠 お歸りなさい、どちらへ。

おとり 一寸そこまで用達に。

小篠 おかみさん、こなひだからお話ししようと思つてゐたんですが、病氣でひいてゐるたもんですから。つい今まで何しませんでしたけれど、伊達先生のあの蚊やり火のお掛軸を一度かしていたゞきたいんですが。

おとり その事なら、五坂さんの事もあるし、こちらから待つてゐたんだよ。あゝ丁度よかつた

小篠さん、あの掛軸のはなしだがね。矢張りあれは私あづかつておかなければなりませんよ。

小篠 女將さん。

おとり 何ですの。

小篠 だからあれは、あれはまだ私が濱町にゐた時分先生にお願ひして描いていたゞいた大事なものだといつたぢやありませんか、生命にかけても、あたしあれだけは……

おとり ちよいと、あなた義理つてこと知つてる？

小篠 え？

おとり そんな身勝手な事ばかり言つて、どんな大切なものか知らないけど、私の方には随分お

前さんにや、お立替があるんだよ。

小篠 ……

おとり お父つあんが病氣だと言つちや百圓、何處そこへ義理をするんだからと五十圓、やれ小遣ひだ、やれ拂ひだと言つて、二十圓三十圓持つてつた物だけだつて、生優しいものぢやないんだよ。あたしだつて金の成る木をもつちやるないんだよ。自分の方の都合のいゝ事ばかり、たかが掛物一本返しておくれたあ何處を押ししてそんな音が出るの。……それほど大きな事が言ひたければね、自分の方の不義理を綺麗にしてから、何とでもお言ひ。……冗談ぢやないよ。本當に。……

小篠 すみません。……けど、あの掛物だけはお金に代へられないものなんです。おかみさん、

どうぞ後生ですからあれだけは。……

おとり いやですよ、お断りしますよ。

小篠 でもかういふ處へかけて置いて置いちゃ、何だか勿體なくて。……

おとり 勿體ない？ さうでせうね、私ん所は地獄宿だからね。

小篠 あら、そんな、

おとり あゝ、口惜しい、地獄宿と言はれたのは初めてだ。随分なんだね、お前さんて人は、

小篠 おかみさん、そんな事あたし。……

おとり さう言はないばかりぢやないか、お前さんの言ふ事をきいてゐると。……うちの人があるものが好きだから一寸借りて掛けて置きや何だい、その言ひ草は。……

小篠 でも皆さんがお遊びなさる所ですから。

おとり え、さうですよ。お遊びなさる所ですよ。どなたも人一倍席料を出して汚なくお遊びなさるのさ。お綺麗なのは貴女ばかり、お顔もお綺麗ならお體もお美しい、その代り一方ぢや随分と御勘定に汚ない事をなさいますねえ、やれおとりさん、それおかみさんと、御勝手の時はお姫様御用金、まるでお主へ忠義のために、こんな下つた稼業をして利息を拂つてあげてるやうなものぢやないか。……第一何？ お前さん、二人で待合を出さうと言つて大金を借りておき乍ら、いざとなつていや氣がさしやア、そつくり私におつつけてさ、さうかつて看板まで出したものを……やめられやしないさ。……丸つきり私ひとり貧乏くじを引つ背負つて、どなたかは高見で見物、やりきれるものぢやありやしない。……

小篠 そ、そりやおかみさん、あんまりですわ。

おとり 何があんまりさ。……お前さんその證據にや證文がいられますよ、五坂さんの所へ行つて借りて来て見せませうか、え、見せてあげませうか、あたしばかりの名で、ちやんと證文を入れてあるんですよ、へん、何があんまりだ。……元の主人と思やこそ百に九十九まで蟲を抑へてゐりやつけ上つて。……何が勿體ないんですよ。お嬢さんが聞いて呆れるよ。

小篠 (ひいとばかりに泣き伏す。)

がらりと戸を開け孝とび出す。雛子あわてて抑へ、元の六疊へ入れる。

二階から和歌吉が下りて来る。袖に軸物を抱き出す。

おとり あら姐さん、手を叩いて下さればいゝのに。

和歌吉 小篠さん、これでせう、あなたの大切な掛軸といふのは。……これは私があづかつてかへりますよ。……實は、座敷がへりの通りがかりに、この頃こちらにあると言ひます伊達先生の掛軸を見たくなつて拜見し乍ら、只でも何だつたもんですから、先生と差向ひのつもりでもつて一口飲んでゐたんですが。……

おとり 一寸、姐さん(と、出て)まあ何をなさるんです。

和歌吉 何もしやしませんよ、ねえ、おかみさん、元の主人のお嬢さんをお嬢さんをお嬢さんにお嬢さん、金の利息にもちをつけて、羽搔を締めて油を絞るやうな人の家から、寶物を取りかへして、あづかつて歸るんだよ。

小篠 (思ひ入れ。)

おとり 聞き捨てになりませんね。無駄口は無駄口として、その掛物を我武者羅に持つてかれちやア。……

和歌吉 一寸待つて、我武者羅が妾ならお前さんは我利々々亡者ねえ、ハハ、ハハ、ハハ。第一これは小篠さんの物ぢやないか、(小篠に)ね、妾が持つてつてもようござんすね。

小篠 (黙つて拜む。)

和歌吉 なんですなえ、友達同志に拜むなんて、(と、ほろりとする)あ、この先生の繪を拜むんですね、お拜みなさいまし、私もいたゞく……(と、軸をおしいたゞき懐へ半分納める。)

澤 はい。

おとり (睨んでる。)

和歌吉 席料はお二階へおいてありますよ、それから姐さん袱紗を一枚かして下さい、借り人は私だけ品物は大切です、ですから御當家秘藏と言ふ一番汚れない綺麗なやつをね。

澤 はい！(と、立ちかける。)

おとり おひつこみ。(と、女中を追ふ。)

和歌吉 おつけはれてお許しは出ませんね、人目を忍ぶ癖曳きには、ほ、かむり、ふき流しと言

ふのがあつた、そんな風雅は知らないけど、い、ものがある。(羽織をぬぎ袖だたみにして悠々と軸物をつむ。小篠手傳ふ。)

おとり (うろくしてゐる。)

和歌吉 さ、褌をはしよつて情人だと道行といふところ、先生の畫のお供をしよう。

おとり 一寸待つて下さいよ。……(合方となる)世間に人もないやうにさ、別してこゝは私の家だ、掴み合つては物が損じる、持つて行くなら行つてごらん。いくら須磨の家の姐さんでも勝手な事をさせちやおきませんよ。いづれ然るべきこはい人で掛合ひをつけるから。

和歌吉 然るべきこはい人？ え、く、稻妻でも黒雲でも何でも結構持つて来て頂戴。この掛物の繪ではないけれど、真直ぐな正しい竹ば、そのまゝ、眞青な竿となつて世間の波をのつ切るのです。須磨の家に千鳥はちつと洒落すぎても、雀仲間の友さへづり、私にも味方がござんす、新橋を二つに割つても筋は通して見せますから。(と、言ひ門に出る。)

小篠 姐さん！

和歌吉 心配しつこなし、(小聲で)すぐにあなたのおつ母さんところへお届けしておきますよ。これにおこりなく又御ひいきに願ひます。

おとり 伺つただけおきますよ。御挨拶だねえ。

和歌吉 (小篠に) 體を大切に申しなさいよ。どうもおやかましくございました。

和歌吉去る。小篠、順一の方へ行かうとす。

おとり 下においで、よく腰が立つて歩けるね、借金の重荷の上へ今のあいつの疝癩まで皆お前さんにのしかつた、さあどうしてくれるんだい。胴中がへしをれるよ。

孝、とび出す。雛子止める、金がなくちや駄目といふ仕草。

孝、雛子の紙入れを抜き取る。逆にふる。金が散る。

孝 せめて二三百圓はなくちや、(とび出さうとする。)

雛 待つて。……

孝 おれも男のかけらなら、こんな所にやるられねえ。おい、おかみ、この頃に借を返して祝儀を出すぜ。

おとり (今までたばこをすつて二人のさまを見てるたが) 孝さん、(と、とめる。)

孝 (押しつけて去る。)

雛 一寸待つて……(と、追つて行く。)

おとり 小篠さん。……お前さんのおかげで私はい、恥をかきよ。(と、奥へ入る) だが、かきつばなしぢや置かないよ。

小篠一人でしよんぼり立たうとすると、急に癩を起す。ひとり苦しむ。

順一 (何気なく下りて来たが気がついて駈け下りる) どうしたく。

小篠 背負揚げでしつかり結はへて。……

順一 切れる切れる。

小篠 切れちやいや、切れちやいや、どうしよう。

順一 どうすればいゝんだね。

小篠 お母さんをお母さんを、絹ちゃんを呼んで。

順一 無理を言つてはいけない。かうしてしめては駄目なのかい。

小篠 あゝ苦しい。

順一 何か飲むものでもないのか、薬でもないのか。

小篠 (あると出す。)

順一 (水を持って来て) 癩を壓すのはじめてだからね、手心が些とも分らん、かみさんを呼ば

う、かみさんと呼ばう。……

小篠 口惜しい、あんな奴。

順一 時節だと思つて我慢するんだ。な、堪忍するんだ。何だ、たかが待合のか、あぢやないか。

小篠 え、待合の女房ですとも、そして私はそのかみさんに商賣ものにされる藝者です。(泣く)
順一 うむ。

だん／＼癪をさまる。

電話のベルけた、ましく鳴る。おとり出る。

おとり もし／＼……もし／＼……さよでございます、はア……はア……あッ、さよでございませが、先ほどは失禮……いえ、すみません、ほんたうに……いゝえ、そんな……決してそんな……すぐさし上げます。お約束申したんですから、すぐさし上げますから。……

電話を切つて、おとり、すぐに帳場へ来る。

おとり 小篠さん、断り切れないよ、もう、一寸でもいゝから行つておくれ、でないと、私が如何にも邪魔でもしてゐるやうだから。

小篠 でも、いまの時間に。……

おとり だつてそれも勤めなら仕方がないぢやアないか、……稲木さんだつて分つた方だアね、何も御自分一人のものと、きめておいでになるわけがない、ねえ稲木さん。

順一 (少なからず侮辱を感じて無言。)

おとり ちつとは苦界だと思ひなさいよ。……八方つまつた體でゐるから、あれだけ言つても

まだ分らないの、お前さんは？

順一 (間) 小篠、わたしは歸らう。

おとり (えたりと) そら御らんない、稲木さんはちやんと分つておいでなさる、明日といふ日がないぢやない、逢はうと思へばまた、いつだつて、(と言つて稲木にわざと) ねえ、あなた、さうぢやアありませんか。(と、言つてすぐにまた小篠に) 金が敵の世の中なんだよ、お前さん。

順一 (居た、まねなくつて) 又来る。

おとり わるどめせずとそこ放せ、その方が後のおたのしみもあるといふものですわね。ねえ、

あなた、(と、順一いよくゐた、まねなくなる) ねえ先生、ねえ旦那。……

稲木、帳場を出る。おとり捨てりふにて玄關へ送つて出る。小篠あとを追はんとして及ばず、泣き伏す。

この時花道より五坂を乗せたる俣出づ。

五坂 止めろ、そこでいゝから止めろ。

俣、木戸口に止る。五坂、矢庭にとび下りて木戸口を狂氣の如く打叩く。

五坂 おとり……あけろ……こゝをあけろ。……

小篠、その聲を聞いて驚き身を起す。急ぎ障子のかけに身をかくす。その間に木戸のかきか

出文協承認ア 60242號
7600 部

昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行

鏡花全集 第二十六卷
會費 貳圓六拾錢

著者	泉・鏡太郎
發行者	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市下谷區二長町一番地 井上源之丞
印刷所	東京市下谷區二長町一番地 凸版印刷株式會社 (東京二二三)

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波書店

電話九段(33)一八七番(4)
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

小店の物販に就ては永久に責任を負く度存じませ
小店の物販に就ては永久に責任を負く度存じませ

(凸版製本)

ね外れてあく。五坂闖入す。

五坂 おとり、小篠を出せ、小篠を。……

と、わめく。

おとり (出て来て) まあ旦那様。……

五坂 小篠はどこにゐる、小篠はどこにゐる。

と、いよくわめき立てる。

おとり 今ここにゐたんですが、……あ、さう二階にをります、二階にをります。……

と、その劍幕に怖れて、うろくする。

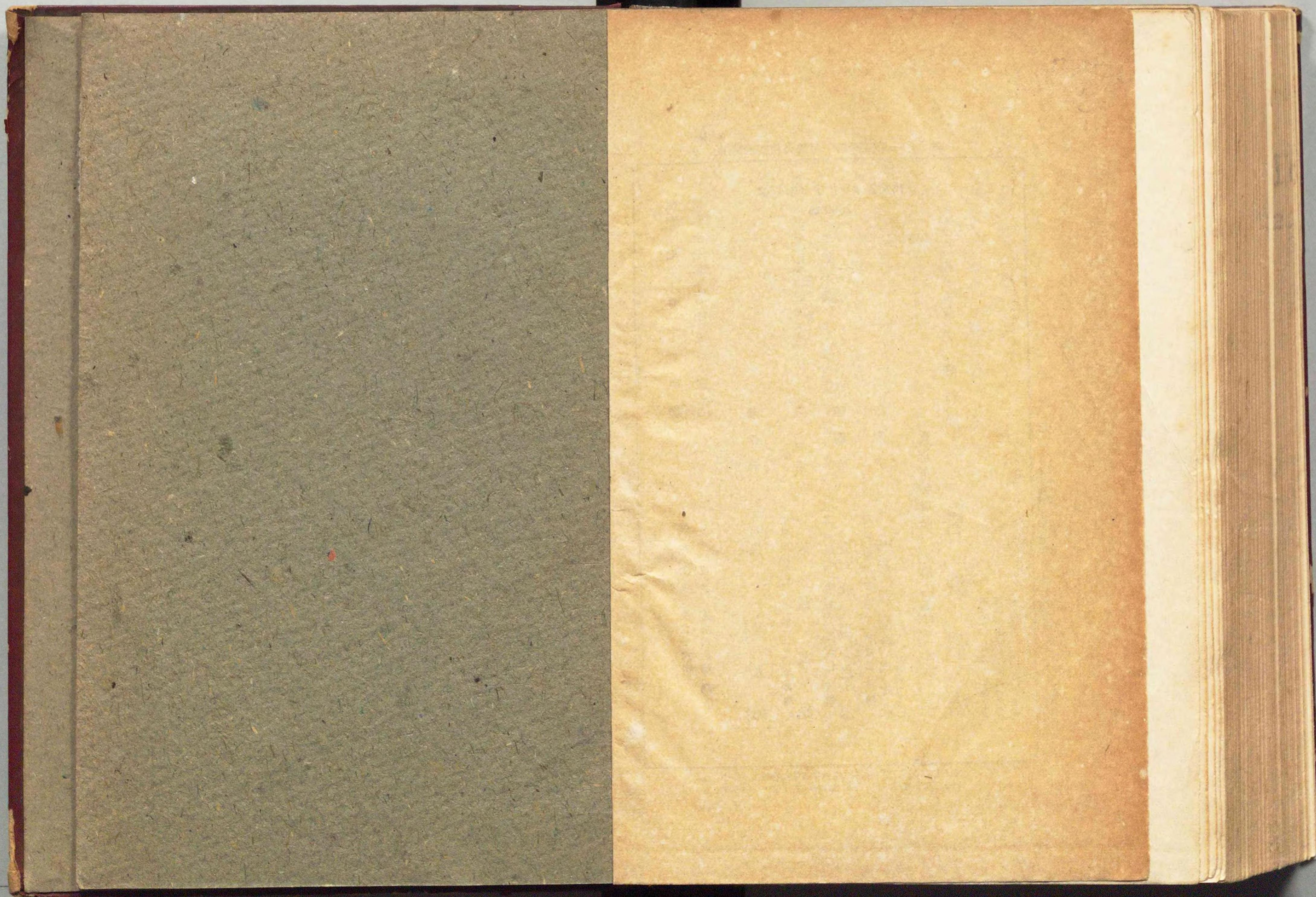
五坂 よし、二階へ行つてとつちめる。……

と、二階へ上る。小篠、その隙に庭に下り、あいてるる木戸口より逃れ出づ。そのとき表より裏にまはりたる心の稲木出づ。

順一 小篠。……

小篠 あ、あなた。……

二人夢に夢見るものの如くに逃れ入る。



798
ic 7

